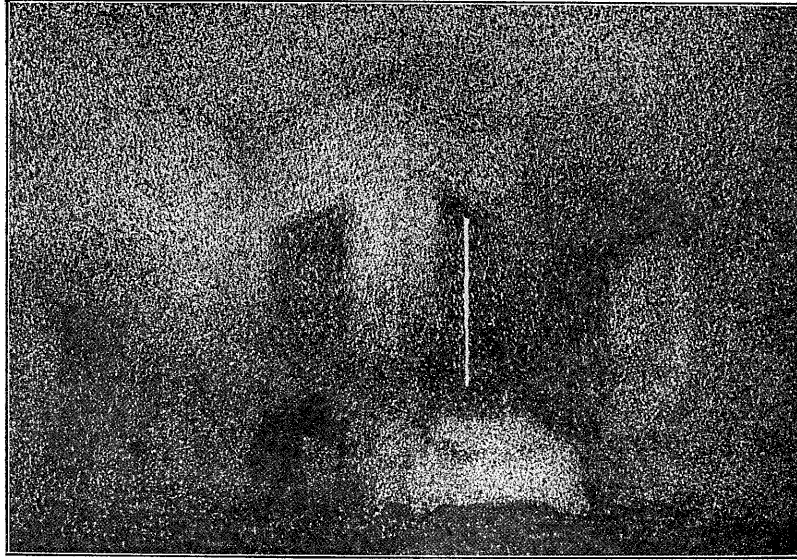


北辰會雜誌



NO. LXXXVII

VI, MDGGGGXXIII

第四高等學校北辰會雜誌

大正十二年七月四日發行

第九十七號

Realistic production at its best. The final moment of Tchekhoff's *The Cherry Orchard* as produced by the touring company of the Moscow Art Theatre. The ancestral house has been sold, curtains and pictures have been taken down, the furniture is shrouded. The shutters are closed. The lights are so dim that the room is no longer a room but a vague, brooding presence. The old servant gropes his way through the darkness, crawls upon the couch and dies.

Drawing by Robert Edmond Jones.
(from *Continental Stagecraft* by Kenneth Macgowan)

北辰會雜誌 第九十七號 目次

| | |
|----------------------------------|------------|
| 獨逸貧乏物語 | 木村謹治 (一) |
| Oscar Wilde の De Profundis | 内方新之丞 (一七) |
| 祈禱 | 伊藤武雄 (三七) |
| つゆ空 | 藤田貞次 (五三) |
| 春より夏へ | 大野正 (五六) |
| 詩二篇 | 大澤衛 (五八) |
| 斷章 | 岡良一 (六一) |
| 盲目の女 | 坂田精一 (六七) |
| 大陸の學術調査を行はんことを少壯學者に望む | 早田文藏 (八五) |

附 録

部報及編輯後記

(九九)

口繪 追放圖 (マサツチオ)

Adam and Eve in "Exile"

Masaccio



Adam and Eve in "Eden"

Miscel

獨逸貧乏物語

木村 謹 治

私に何か獨逸の話をせいと注文されても何も知らないと云ふ方が本當に近い様であります。自分の僅かばかりの經驗を基として全体の事情を傳へる様な口吻になつて來るのは甚だあぶなかしい。何しろ七千萬近い人口の住んでゐる國であります、大体同一の言語風俗習慣によつて統一された一國民ではあります。さすが細かく觀察すればする程違つた處が目について來る。むかうに行く前には獨逸人はかうだとか、獨逸の學校はかうだとか色々聞かされて皆そんなものと思ひ込んで居る。扱て愈々實際に當つて見ると云ひ聞かされた様な處も勿論あるが又それと全く反對な事實も少くない。かういふ理由から甚だ話が致しにくい。殊に戦後の獨逸は内憂外患交々相次ぐといふ次第でありまして人心の動搖が實に甚しい。マルクの相場が銀行に於てさへ一時間毎に變化して居ると同様に明日を計られぬ刻々の變化が色々な現象の上に見られる。

私の參りました一九二一の始めはマルクが悪くなりかけたとは申しましたがまだ參錢から參錢五厘迄の處に落ち着いて、大した動搖もなかつた。その時代には物價が高いと云つても大した不平がなかつた。それが僅か二年後の二月に於ては壹マルクが壹毛に至り甚たしきは五糸にも及んだ日があつたのであります。そして只今も申した通り刻々に變化し行く相場と共に生きて行く上に於て必要な品物の値段が

一定しない。かうした經濟上の動搖は凡ゆる方面に於ける動搖の表象と見る事が出来ると思ふ。かうした動搖の中にあつてこれはこうあれはあゝといふ風に一定の概念をつかみその真相を傳へる事は不可能な事であると思ふなければならない。

私が今諸君の前で、それからそれと話をして行く事實は唯私一個の經驗なり見聞に基いてゐるものであつて決して固定的普汎的な事實ではない事を充分に含んでおいてもらひ度い。

諸君も御承知の如く獨逸は戰爭に敗けた事になつてゐる。けれども獨逸人は今でも決して戰爭に敗けたとは思つて居ない。獨逸人のかうした見方は決して自惚でない事實である。四面楚歌の中にあつて四年以上も一步も敵を自領のうちに踏み入れなかつた勇敢なる働きは確かに誇るに足るべきものである。實際戰爭に破れたのではなくして内に破れたのであります。外觀上整然として一髮亂れぬ様に見えるて居りました。プロシヤ式軍隊が革命の聲と共にくづれて行つた有様を見ますと何人も不思議の感に打たれぬものが無からうと思ふ。實に慢ない末路であります。その原因は一体どこにあるのでありませうか。私は茲で學術的にその原因を研究し列擧する積りではないが、唯重なる原因として見なければならぬのは此の外觀上極めて立派に見えた嚴重なる軍紀に存してゐたのではあるまいかと思ふ。成程軍紀は如何に嚴重であつたにしろ、それは空しき外觀に止まつて居りまして精神的なる據り處がない。従つて平時はいかにも立派に見えて居りまして一旦あらしが立つて参りますと必ず動搖を來し崩壊する事になる。歐洲の戰爭は正に此のあらしでありました。それも戰爭が好況にある間、まだ力が充分である間は此のまゝの形で續いたのであるが戰爭の終り頃になつて力もつき戰爭もはかばかしくなくなりましてこれ迄形式的なる軍律の重荷に壓迫されて居りました兵士の心には一点の黒い陰影が宿り始めたのであ

ります。一体自分達は何の爲めにかうした苦痛を忍ばねばならぬのか、何人の爲めにかうした戰を戦はねばならぬのであるかといふ疑問は、幾日も幾日も塹壕の中にもぐらもちの様な生活を續け時には膝を沒する様な泥水の中に立つて敵の砲彈がいつ自己の生命を絶つか分らない不安のうちに精根が次第につきて來まする場合、敵を仆さうとする意力の代りに一種の知的なる内省が行はれて來るのは心理的に當然なる行き方であらねばならない。殊に市井の雜踏から遠く離れて目に落ちて來るものは太陽の光と夜は星空の星のみである。かうした境遇にあつてはたとへ哲學者に非ずと雖も必ずその思考が人間生活の附隨的な事物から離れて屢々本質的なものに觸れて行くのは自然の理であらねばならぬ。これ迄官僚的國家のうちに育つて参りました國家の政治を爲政者にのみまかして來ましたナイーヴなる人々がその多數を占めてゐるのでありましてシユターツビユルゲル即ち國家市民としての訓練がない、兵卒としては唯嚴格なる軍紀の下に盲目的服従を強いられて來てゐる、曾つて内省の餘裕を自己に與へなかつた多數の人々であります。かうした人々が今困難の極点に達しまして且つ自分達の生活と將校などの生活を比較して見ると彼等は物質的によい生活をしてゐる事が分る。私が伯林で奉職して居りましたセミナルの學生に將校として出征した男が居りました。此の學生は出征して反つて元氣になつた位であつて生活上に於ての不便を感じなかつたと申して居ります。それに反して私の同僚でありました教師の方は一兵卒として出征しまして遂にはげしい神經衰弱に陥つて疾兵除隊になつたといふ人であります。此の人は立派な体格の持ち主でありますが今だに根治しない事を訴えてゐるのであります。その他の話を聞いて見ましても將校と兵卒が一体となつて困難を共にするといふ事がよく行はれなかつたものらしい。精神的に色々な問題を考へさせられると共に物質的にもかうした差別を見せつけられるとすれば如

何に鈍重なる獨逸人と雖も不平が次第に心のうちに盛り上つて來るのは極めて自然なる行き方であらねばならない。ガイザーを始めとして當時の爲政者は一つは外敵に向ふに急であるのど一つは舊來の政治に慣れて人民は國家の機具であるとして軽く取扱つてゐるうちに此の單純であるべき道具が人間性に目醒めて動き出して來たのでありますから堪りません。勿論そこまで至るには非戰論者と社會主義者との運動宣傳が與かつて力があつたにしても彼等の蒔いた種が要意されたる地面に落ちなかつたらばあつた結果を生み來る筈は無いのであります。

一九一六頃から次第に食糧の欠乏が現れて參りましたのが一九一八即ち戰爭の了る時分になります。益々甚だしく相成りまして國民は言葉通りに餓え苦んだといふのであります。此の國民的饑餓が又戰敗の大なる原因であります。食料供給の点ではむしろ戰線に居る方が充分であつたので内地に居る國民がその犠牲になつたといふ譯であります。當時伯林に居りました獨逸人であります私の友人の經驗を聞いて見ましても如何に悲惨であつたか想像される。一切の食料品は切符によつて供給される。そして主食でありますパンは一週間に一本だけ供與される、一本と申しますと一尺二三寸程の長さの黒パンであります。それをもらうとこれが此の一週間自分の命をつなぐ主食であるかど情ない氣分になつたと云つて居ります。仕方がありませんからそれを七分しその各部分を更に三分して一日三回の食事に當てるのであります。假に一尺四寸と見ましても一日分が二寸・一食分が七分足らずのものに過ぎない。主食のパンがこれであります。バターは勿論人造バター、それも極く少量であります。肉は一週一回これも云ふに足らぬ分量であります。それが此の先いつまで續くか誠に心細い次第であります。かうした國民の欲する處は大概知れてゐる。四面悉く敵である、どうしても此の敵を打ち破らねばならぬといふ勇敢な心持

5

ちは決して無くなりはない迄も、自己の胃の腑のひもじさが、何よりも先に來る當面の問題になつて來ては全く精神的なる余裕といものが無くなつて來る。これは無理ならぬ事である。腹が空いては戰爭の出來んのは勿論の事況んや君愛國をかゝる空腹なる國民から要求するのは要求する方が正氣の沙汰でないのである。革命黨が此の間の消息をのみ込んで第一國民にパンを約束したのは實に巧妙なる政策であると思ふべきではない。けれども彼等の約束は遂に一度も實現せらるゝ事なくして今日に及んで居る。否此の先ご迄此の状態が續くか一寸見當が付かないのであります。日を追うて次第々に悪くなつて行くのであります。實に獨逸の一般民家は今困窮の底へ一步一步沈み行きつゝあります。私の參りました當時即ち一九二一の始め頃にはどうやら内外の爭亂からほつと一息ついた時分でありまして物質の欠乏もあまり甚しくはなく唯砂糖位がまだ切符制度でありまして角砂糖といふものは全く無く私が偶々パリから買つて參りました角砂糖を一包下宿の主婦へ土産に致しました處非常な喜びでもつて深く藏した切り來客でもなければ仲々取り出さん様な次第でありました。マルクの相場も仲々良くなつて居りました一マルクが參錢から參錢五厘の間を上下して居りました。しかし生活状態が良くなつたとは申しながらやうやく一息ついた位の程度で下級民の生活は到底茲でお話しをして諸君が想像し得る様なやさしい程度のものでありません。私は一九二一の一月下旬に伯林へ參りましてそれから中一月をおきまし三月の一日に貧民救濟會の案内で伯林北部の貧民區を訪ねた事がありました。貧民區と申しましても流石世界的都市の事でありますから本所深川あたりのそれとは少くとも外觀上は天地雲泥の差があります、むしろ丸の内邊に比すべきものでありまして建物は古すゝけては居りますが、四階建の石造の堂々たるものであります。案内に立つた婦人の説明によりますと此のすゝけて居ります建物の前面も以

前には屢々塗り代へられたものであるとの事でありました。それでその通りを素通りした丈けでは別段貧民區らしい何物をも見る事が出来ない。唯街頭に遊んで居ります小供の体格と服装に於て、それかと思はれるものがある。顔色の蒼白な小供が大概ははだし、さもなくばぼろ／＼に破れた靴をはいてゐる、服装も勿論それに準じてゐるのであります。それに注意すべき事はこれらの小供は殆んど大部分下着のシャツを着て居ない。小さな小供にはラヒチスといふ營養不良から來る軟骨症が見られる。足が妙にゆがんで鳴の様な歩き方をしてゐる。かういふ小供が自分達の上にふりかゝつてゐる運命にも氣がつかずに、伯林の三月と云へばまだ中々に寒い街頭に於て嬉々として遊んでゐる有様を見ますと實に悲惨なる感慨に打たれるのであります。それが此の貧民窟なる丸の内の内部へ一足足をふみ入れますと言語に絶する光景に接する。私が案内されて訪問しましたのは色々の條件にある十軒の家族でありました。いづれも二室か三室の光線のよく通らない穴の様な處に住んでゐる。

獨逸の勞働者は革命以後に於ては比較的よく支拂れて居るといふ事は一般に云ふ事であり私も屢々耳にするのでありますから、その邊の處を確めやうと致しました。その質問に對しては案内の婦人は力強く反對を主張するものであります。成程給料は戦前に比して非常によくなつてはゐる、失業者の少ない点に於ても他の歐洲諸國に比して遙かによろしい。けれども物價の暴騰且つ不安定とは一定の給料と決して平行して進まない。それも或種の生活條件のもとにある勞働者はよろしい。例へば特殊の技術に對して特によく支拂れる者或は獨身者で家族の係累がない者などである。普通の勞働者で小數の家族を有するものが健康で働きて始めて生活に足りる丈けの收入があるに過ぎない。私の見舞つた家族は悉く貧民救濟會の補助を受けるなり或は補助を受ける資格を有する者でありましたが大体に於て三様に分た

れる。一つは職を失つてゐるもの、第二は働けるものが病氣で収入の道が無くなつたもの、第三は健康で充分働けるに拘らず家族が大勢であるか報酬が僅少で生活に充分でないものであります。その住居へ這入つて参りますといづれも一種異様な臭氣が鼻を衝いて來る、それは強く鼻を刺す様な臭氣でありまして先づ腐さつた魚と煙草の脂をこね合して壁を塗つた様な感じがあります。或る錠前屋は地下室に住んで居りましたが金屑やら何やらで一杯になつてゐる仕事室丈けは通りの方に面してゐるので窓から光線が可なりはいつて來るが寢室と來ては全く眞暗でありまして鼻をつまゝれても分るものではない。やうやう懐中電燈でてらして見ますと實に不潔を極める寢具でありまして一つの寢台には三人も寝る有り様、それが不足といふので浴槽を寢台につかつてある。浴槽を寢台に使うといふのは成程よい考へである。これは他でも見たのであります。西洋の浴槽は諸君も御存じの様ゆる／＼と足を延す事が出来る様になつてゐる。今では石炭が高いからとても當分風呂へ這入る見込が立たない、むしろその中へ這入つて寢た方が樂である殊に小供ならば二人位は充分に休める。此の錠前屋さんは小供が多くつていくら働らいてもおつつかないといふ氣の毒な人でありました。又主人が病氣で肺結核で寢てゐるといふ處へ参りましたが戸が開け放しで家族のものは一人も居らない、恐らく女小供悉く働きに出た留守だらうと思はれました。そして病人はぼろにくるまつて死んだ様に動かない。私どもが這入つて行つて言葉をかけましても一向返事をせんのであります。自働車などへ乗つて貧民窟を見舞ふ様な人間にはおれの心持ちが分るものかと云つた風な恐ろしい沈黙で私どもを追ひ出してしまひました。私は持つて行つた見舞のミルクの罐を置いておいて逃げる様に出た事を覚えてゐる。次は戦前には、ポーランドで二十幾個の室を持つて堂々とやつてゐた商人の未亡人の住居を訪ねましたが、夫が亡くなり財産は敵國

に没收されて今は見る影もなくおちぶれ果てた生活を送つてゐるのであります。昔からの貧乏でない丈けむごたらしい。所謂成貧でありまして事毎に昔の事が偲ばれると見えまして私どもを見るなりすぐも涙になる。他の人々は貧乏ながら可なり元氣よくやつてゐるが茲では追憶の悲しみが精神的の苦痛をも生み出してゐる。台所と寢台とが狭い一室にあります。煮たきの湯氣などが寢具などをむし返してしめつばくなつてゐる。いつでも菌が生ひさうである。そこへまた生後一年と立たん様な小供がぼろにつままれてすや／＼と寝つてゐました。最後に訪ねました處は實に驚くべき光景でありました。今まで見ました所は貧乏とはいふものゝまだ何かしら家具らしいもの或は寢具らしいものがある炊事の道具も一通りは揃つて居ります。揃つて居りますればこそ魚の腐つたのと煙草の脂との混合臭も出来て來るといふものであります。然るに今度の家は不思議に臭氣がない。臭氣がないのは不思議ではない。室内全く無一物だからであります。赤貧洗うが如しといふ言葉がありますがその實際の光景は、はるばる伯林に参りまして始めて見たのであります。ガランとしたへやの中には敷物は勿論の事寢台も寢具もない。始めに二三度コッコツ戸を敲きましたら戸を開けて呉れた。極度の近眼鏡をかけました背の高いまだ若い男でありました。へやの中を一寸のぞいて見ました時にはガランとしたその空間には此の男以外の生物が居らんと考へられました。處がよく見ると窓の光のどゞかない片隅にうづくまつたものが居る。それが彼の家族なのであります。即ち臨月の腹をかゝへて氣分が悪いと寝てゐる彼の妻と妻の懷に抱かれてゐる五つになる女の子であります。主人はこの頃まで或る工場へ出て居つたが眼が悪い爲めに永く働く事が出来ず解雇されて今の處職がない、如何にして生きべきか自分でも解らない、妻は病床に臥し兒は餓に泣くなどゝ云つた處でおつつかない非度さであります、此の男は始終一種笑ひに似た筋肉運動を口

邊に浮べるのであります。それが一種の凄みを添へるのであります。案内した婦人さへも全く驚いてしまつた位でありました。なせ寢臺をかりる様に申し出んか、なせ早く云はないのかと可なり強く云つて居りました。その主人は五つになるといふその兒を母の手から取つて窓ぎはへつれて参りますとその兒は恰度捨てられた仔犬の様に全身をぶる／＼振はしながら泣き出すのであります。それが五つといふに二つ位にしか見えないまだ立つて歩く事が出來るのであります。親のなだけで流石此の兒の爲めには藁を少しばかり積み重ねて臥處をこしらへてありました。これが人間の生活であるかと私はつく／＼伯林の金持ちの處に飼はれてゐる犬をうらやんだ位であります。實際主人と同じものを喰ひ主人と同じ糞をたれてゐる伯林の犬はこの人々よりどんなにか幸福か判りません。私は持つて参りましたミルクの罐にチョコレートそれに少しばかりの金を置いて参りました。あとで案内の婦人を通じて此の人々へ僅かばかり金を送りましたがそれから數月後にその婦人からの手紙で此の赤貧微笑居士も適當なる職を得て兎に角その日を暮せる様になつたから喜んで呉れる様にそのたよりがありました。

この人々は特に甚だしい貧乏の部類に這入る人々であるには相違ありませんが一般社會と雖も決してそれと大なる差がない。それが時と共に漸時にその程度を加へて行く。私の参りました當座では中流社會は困つたとは云へ條、戦争當時の様な事はありませんしそれに極端な國民的窮乏時代を脱却したばかりの處でありましたから恐らく外國人が感ずる程に感じない人も多かつたらうと思はれる。獨逸人は一体正直な人間でありますから困るとそれをよくこぼす。決してぢつと自分獨りの胸に疊んでおく様の事をしない。多少親しい仲になりますと何でもよく打開する。それでその訴へる程度によつて實際の財産を測定する事が出來るのであります。私は二年間同一の下宿に居りまして此の財政バロメーターを測つた

のでありますが明に漸次に悪くなつて参りまして殊に最近即ち昨年の暮れから本年の始めにかけてそれが急速なる歩調で進んで来たのであります。フランス軍がリール地方を占領しましてからのマルクの暴落と物價の暴騰とは全く底知れぬ有様であつたのでした。十二月廿日前後にはマルクは一磅に對し二萬五六千でありましたものが僅か三週間後の一月十日には已に十萬となりそれから數月にして實に二十四萬マルクまで下落したのであります。如何に窮乏になれてゐるとは申せこれは又餘りにひどい。日常生活品の値段は刻々に騰つて行く。獨逸の主婦は朝市へその日の生活用品を買ひ出しに参るのであります。がきのふ買入れた丈けの品物をととのへる爲めに今日いくらの金を要意して行くべきか全く不明なのであります。しかもその財布はいつも充實してゐる譯ではない。主人の収入は決してマルクの相場と相伴ふ様には出来て居ない。家族を養ふ責任ある主人と限られた収入を以て明日をも測られぬ物價と戦はねばならぬ主婦とは全く神經衰弱にならぬのが不思議な位であります。或人が獨逸の主婦は悉くヒステリックになり男は悉く神經病になつてゐると申してゐたのも事實であります。これは町を歩きましても感ぜられる。奇体なものでありまして、かうしてた事は妙に直感される。私の様に獨逸に對して可なり的好感を有し相當な理解を持つてゐる積りのもので別段色眼鏡で見るとはありませんが二年前と二年後とは何となく人の印象が異なる。それは決して旅行者がよく言ふ様に外國人に對する憎惡の感情から來るのではない。それよりも一層直接なる自己の生活問題から湧いて來る不氣嫌なのであります。勿論間接にその不氣嫌から自然、人の貧乏をよそにしかも自分の國で大手を振つて贅澤をしてゐる外國人に對する不快の情が出て來るのではあります。若し自分が困らなかつたら寧ろ外國人などは問題にせんのであります。そして鈍重として知られてゐる獨逸人も此の頃では極めておこりつばい。つまらぬ事ですぐ

おこる。人の込み合ふ様な處では殆んど必ず口論をする。それが極く小供臭い事である。やれ足をふんだとか背中を押したとかいふ事で眞赤になつて口論をする。それが男ばかりでない往々にして女まで金切聲をはり上げるのであります。縁のない外國人の吾々でさへ情けないと思ふ事があります。そして話が始まると必ず金の話物價の話であります。何は何マルク、おれは何マルクで何を買ったといふ風な言葉の出て來ない會話をいふものは存在しない位であります。米國へ参りました人の話に朝から晩までマネーマネーといふ言葉で耳にコブが出来る位聞かざるにはうんざりするとの事でありましたが只今の獨逸もマルクマルクで息がつまる様であります。唯米國と異なる處は米國は有る金の話でありますし獨逸は無い金の話であります。アメリカのマネーは寄つて來る奴で獨逸のマルクは逃げて行く。此の逃げて行くマルクを追ひかけやうとする努力なり宣傳が小供の果にまで行き渡つてゐる。小學校や中學校などの生徒までが兩親などの話をきいたり見習つたりしてお互貸借關係にマルクとドラーの相場關係を支持ひの際に考へて見たり甚しいのになると投機まで試みるといふ風で心ある人々の嘆聲は往々新聞で見られるのであります。曾つてベルリンから二時間餘り離れて居ります處に白痴兒童の學校を參觀した事がありました。村の中の一軒屋でそこに生徒と教師が起臥を共にしてゐる。色々の點で感服は致しましたが唯一ツ異様に感じた事があります。それは夕方になりました、その日の夕刊がくばられました、すると生徒即ち白痴の生徒達が先を争つて新聞をのぞくのであります。何か面白い記事でもあるのかと思つてゐましたら今日はドラーが何マルクであるかを知らうといふのであります。即ちマルクの相場は白痴の少年の頭さへも支配してゐるのであります。私は何だか裏切られた様な不快な感に打たれました。白痴ならば白痴らしくしてゐるがよい。普通の人間は皆マルクに苦んでゐるのであるからせめて此の村

の中の軒屋なる白痴學校丈けでもマルクから遠ざかつてゐてもらい度い様な氣がしたのであります。尤も此のマルクに苦しむものは白痴ばかりでない。生れたばかりの嬰兒も死んでつめたくなつた人々までも此のマルクに祟られてゐるのであります。貧しい人々は小供が生れてもむつきがないのですから裸のままを新聞に包むのが普通になつてゐる。死人はそのまゝ捨てる譯にも行かんでこれこそえらい厄介な者にされてゐる。生きてゐるうちは歩く事が已に贅澤とされてゐる。靴の底をとり代へるのに私の立つ時分一萬マルク程致して居りました。それ丈け云つても諸君には分りますまいが下女の給金が先づ一月五千マルクであります。即ち使ひ歩きを専門とする女中先生が一足の靴を修繕させる爲めに二月分の給料を出さねばならぬのであります。乗物は勿論贅澤であります。さればと云つてうちの中へ引込んでゐては逃足のマルクが益々遠ざかるばかりであります。今の獨逸人は行住座臥凡て贅澤ならざるはなしといふ次第であります。

かういふ風に朝から晩迄汗水流して働いてさへ追つ付かない國に於ては平素でさへ報いらるゝ事の極めて薄いしかも一國の文化の中樞を構成する學者即ち精神的勞働者並に學生は最も甚だしい打撃を蒙つてゐる。學者も大學教授の古參位になれば相當に支拂はれて居りますが將來の獨逸の精神的分野を代表すべき若い學者大學の講師高等學校あたりの教授などは實に今大なる試練に遭遇しつゝあるものであります。落ちて自己の内面的生活に深く掘り入る爲めには生活の脅威が餘りに大きい、その研究に材料を要する様な事業例へば醫學の様なもの生活難の外に材料が手に入らない。一疋の廿日鼠が一斤の白パンよりも高いといふ事などから推してもその程度が考へられる。参考書も内地の圖書でさへ個人としては殆んど絶對に買へない。伯林大學教授のハルナック博士が或る本屋から聞いたといふ話によるとそ

の本屋へ来る七人の客のうちで一人丈けが何かしら低廉な小冊誌を買ひ取る丈けであつて他の六人は本の名を擧げて定價を聞いた丈けで歸るのであるとの事でありました。況んや外國圖書は之を購入する事は、個人は勿論堂々たる圖書館でさへ充分には不可能である。極めて必要なる専門の雜誌でさへ各圖書館が悉く之を取りよせるといふ事が出来ない。それで各圖書館が連絡を取つて必要なる分は少くとも一部丈けは獨逸のごとかにそなへて置く様にし必要の場合にはそれを融通し合うといふ風にしてゐるのであります。私の知人の話によりますと雜誌の購入は不可能である處から英米などへ盛に雜誌の交換を申し込みましたも仲々容易に交換をして呉れない。米國の學者はこれに應じたが獨逸の雜誌二冊に對してアメリカの分が一冊といふ條件であるとの事でありました。内容から申しますと遙かに獨逸の方が優れて居るとその人が申して居りました。英國の方は直接獨逸の本屋から買った方が安いといふ理由で交換を承知せんとした事でありました。歐米は學者でさへかう打算的になつてゐる、實にいやになります。若い學者達はかうした苦境にあつて達し得た結果を扱て發表する段になりますとこれも亦殆んど不可能である。獨逸の本屋へ参りますと日々新刊のものがごん／＼出て居る、文運如何にも旺な様であります、或る英國人も獨逸の學者は困つてゐるのは疑はしい本が盛んな勢で出てゐるのでも分るといふ風に主張したに對してハルナック教授はこれにはげしい反駁を加へて居りました。成程本は出る、けれどもそれは本屋が自己の利益本位から選んだ本が多いのであつて眞實眞面目なる業で發表せられず空しく籠底に埋れてゐるものが多いからあるか分らないのであります。かういふ學者を救済する爲めに獨逸政府は可なりを努力を拂つてゐる。その機關の最も大なるものとしては die *Nogemeinschaft der deutscher Wissenschaft* があります。政府の補助と同情ある諸外國からの寄附とで出來てゐるのであります。獨逸の若い

學者達はかうして一方生活難と戦ひつゝ、乏しい材料を以て眞理の爲めに實に目醒しい戦ひを戦ひつゝあります

學生はと見ますとやはり同様であります。流石學問の國丈けありましてかうした中にありましても學生の數は戦前と殆んど變化がない、否一九一八年から二二年頃までは反つて増加の傾向であつた。これは四年間戦線に立つた學生の歸つて來たものと若い將校が軍隊の廢止と共に學問によつて更に新たな生活の道を開かうとした事に基いてゐたのであります。さういふ人々もあらかた片づいた今日でさへ學生の數は減少しない。然らば彼等は果して學問するだけの餘裕と資力があるかといふに、全くその反對でありまして餘裕處か喰うにさへ困つてゐる人々なのであります。戦前ならば一月百マルク即ち昔の五拾圓今の壹錢でもつて可なりにやつて行けた、本も必要な丈けはそれで買ひビールも時々飲めたのであります。それは今では昔の夢であります。家元の補助を受けてゐるのは百人のうち廿人あるなしであと八十人は悉く *Werkstudenten* 即ち勞働學生なのであります。つまり勞働によつて生活の資を得つゝ、研究するのであります。勞働の種類は種々様々でありますが時間をきめて銀行會社へ行く。銀行會社では安い給金で能率のよい學生を出來る丈け利用しやうとする。それから外國人の語學の教師は上等な方でありまして錠前屋の仕事までする。休暇には種々の筋肉勞働をする。私の知つてゐる學生で休暇中鑛山の坑夫となつて三月間を坑の中へもぐつた者がありました。それなどは別に珍らしい事ではない。さうして得て來た金で新學期の研究費に當てやうとするのであります。マルクの暴落によりまして折角額に汗し得たる貴い勞働の報酬が唯の紙屑の様になつてしまつた氣の毒な人を知つてゐます。服裝なども實に非度い。丸で乞食であります。食事は小中學生と同様クエーカーの食事供給所から一日一回の營養を供

與されてゐる者もある。學生救濟會では出來る丈け學生に安く食事を給してゐる。一昨年あたりは一食五マルクでありましたが此の頃では二百マルクしてゐます。何を食べさして貰へるかといふにバケツの小さい様な鉢へじやが薯を主として少々の肉片を入れた様な汁が一杯であります。給仕の人がそれを大鍋からくみまして渡す、偶々肉片が這入つて居れば非常な幸運といふ事になるのであります。私も一度參觀致しましたが昔の兵營をそのまゝ使用致しまして食堂にしてゐる薄暗い長細い室に極く粗末な食卓と腰掛どがいっつか置いてあります。そこへ座つて此の稀薄なる汁をすつてゐる。腹丈はふくれるがまづいので閉口であると友人は云つてゐました。同構内には又トラック式の低い細長い建物がある。丁度二階のない日本家屋程の低さで私が屋根をのぞける位である、そこは學生の宿舍にされてゐるとの事でありませう。

かうしたある限りの困難をしてまでも學問をせねばならぬものか、何故早く銀行會社なり這入つて生活の爲めに安住の地を求め様にせんのであるか、私はかうした質問に對して満足なる解答を得た事がない。いつも仕方がないぢやないかとか、やりかけた以上はなごゝ、答は簡單であります。私は此の簡單なる答のうちに彼等の精神を探り度い。即ち學問に對する傳統的なる尊敬の精神は貧困によつて克服さるべく餘りに旺盛である、彼等は大學に於て教養を受けるといふ事に一種の誇りを有する者である。而して大學に這入つた以上は仕方がないぢやないかといふ言葉のうちには大學に這入つた以上その課程を了へるのが當然であつて、やめるのが不自然であらねばならぬ。彼等の精神的敎化の慾求はかくの如く旺盛である、同時に彼等を壓迫する物質的窮乏も亦實に大なるものがある。彼等は實に今や試練の鑄釜の中にある事を見のがしてはならない。獨逸の大學生はビールを飲む事でも有名である。それは諸君

の已に知つてゐる處である。けれども諸君は今でも此の風が行はれてゐると考へてはならない、私は色々の學生と會食したが一度もビールを痛飲する者に會はない。痛飲處か彼等の或者は一滴も口にせぬものさへありました。そして多くはビールを飲む様な學生を時代おくれの舊式なる人間として輕蔑する風が見えるのであります。

獨逸は今全國を上げて實に大なる試練の時代にあります。そして人間の二つの型が益々はつきりと分れつゝある様であります。丁度社會生活に於て貧富の懸隔が益々甚しくなつて中産階級が無くなつて行くと同様人間のタイプも亦二つに分られつゝあると見られる、一つは物質の壓迫に堪えずしてその奴隷となり果てるもの、つまりそれと迎合してその壓迫からのがれんとする者、一つはその壓迫に打ち克つて益々自己の心的要求を貰かんとする奮闘的勇者とであります。

いづれにしても獨逸人は今國を舉げて亢奮し緊張してゐる。困難汝を玉にするか或は玉となつて碎けるか、兎に角心あるものゝ注目に價するものがあります。私は嚴寒の二月に此の緊張せる獨逸を去りました。殊にフランスによるルール地方の占領に對する無抵抗的なる反抗の深い意味とそのうちにかくれてゐる物凄じばかりの緊張を見つゝ獨逸を去りました。私はつくづく日本は正に花の盛り、人は三春の行樂に時の經つのを忘れんとする有り様にありました。私は此のお芽出度い國に生れまして諸君と共によろ／＼とそのお芽出度さの意味を考へて見度いと思ふ。(講演大意)

Oscar Wilde ~ De Profundis (S.M.S.)

内方新之丞

Ah! happy they whose hearts can break

And peace of pardon win!

How else may man make straight his plan

And cleanse his soul from Sin!

May Lord Christ enter in?

(From The Ballad of Reading Gaol. V)

「悲哀のあるところ、^{聖地}の聖地あり」(Where there is sorrow there is holy ground) とはいつたら何であるか。「藝術的生活は、^{すなはち自己}自己發展である」(Artistic life is simply self-development.) とはいつた何であるか。

それこそ嘗ては「己の靈ひを快樂の酒杯に投じた」オスカア・ワイルドの「痛みに指先の感じがなくなるまでも、固い繩を細い^{まがひだ}填皮に、裂か」なければならぬ、^{ごん}ごん底から叫びに叫んだ、血の滴るゝや

うな告白である。これこそ「彼の時代の、藝術と教養に對して象徴的關係に立つてゐた」彼の「小さい、鐵窓の塵だらけの硝子窓を通して」入つてくる「鈍い灰色の光」をうけつゝ、「板のベット」に蹲まりながら、會得した悲痛なる真理である。

彼は一八五四年十月十六日、女の子を望んだ母を裏切りながら、愛蘭の都ダブリンの、外科醫の次男として生れてきた。彼の母はスペランザなどといふ雅名をもつて、若くしてかなりの文名をあげてゐた、賢い美しい眸をもつた婦人であつた。少年としての彼は、背が高く肥つてゐて、水泳以外は凡ての戶外運動の大嫌ひな、無口で偏屈な性質をもつてゐた。彼は色々澤山本を讀んだ、けれど數學が最も不得手であつた。いつたいに大して目立つところもなかつたけれど、いち度口を開けば必ず、警句や綽名を投げつけずにはゐなかつた。學校では日曜日だけしか高い帽子を冠るのが習ひであつたけれど、彼は一週間中冠らうとした。一八七四年ダブリンを去つて牛津のマウダリン大學に入り古典を學び、ダブル、ファストたることを得、ニュウデゲットの懸賞詩に當選した。彼は先づ、ウォルター・ペーター、殊に「彼の一生に對して實に不思議な感心を與へた」といふ *Renaissance* に影響された。彼は少くとも、當時沈滞してゐた英國批評壇の表面を騒がしてゐた、人生に對する美學的論說の代表者と考へ初めるやうになつた。平凡に生きるやうな生活に満足せず、美的な事物のあひだにおかれて美化されるといふ望を懷くやうになつてきた。彼はほかの友が、ブルドックに熱中してゐる間に、感動した色々の印畫で室を裝飾したり、青磁を集めたりして、友だちに侮辱されてゐた。彼の評論はフランス象徵派のそれによく似てゐた。彼は彼らと同じく藝術に熱情を求め、あの *Romantic Movement* の偉大なる人々に深き

根をもつラファエル前派の教に、彼の藝術と人生の法則を見出した。彼は常に自然は藝術を模倣する (*Nature imitates Art.*) と主張してやまなかつた。

しかし彼が己の人物を目立たしめんとして、いはゆる審美的服裝 (*aesthetic costume*) —— 天鵝絨の上衣と短いブルーチと、ごこがキャバリア風の大きい折襟の柔い襯衣と、黄綠色かもしくはテラツコタ色の巨く結んだ衿飾の服裝をして、彼の美の哲學の宣傳につとめたのは牛津を卒業してからであつた。一八八一年彼はアメリカを、「英國の文藝復興」、「住宅裝飾」などについて講演してゐた。が、いつたいに嘲笑と嫌惡で迎へられてゐた。しかし彼は己の乗つてゐる馬車の硝子窓が悉く破られて了つても、全く氣狂の如く盲動していつた。なせかれはかくの如きことをしなればならなかつたか。彼は金を欲したからであつた。そして血氣と虚榮は之に盲目ならしめたのだつた。そこにはむしろ美の強い欲求よりも、盲目的でヒステリカルな欲求の異常性があつた。彼はいつも扮装箱をたづさへて舞臺上の芝居のための如く化粧した程だつた。—— 彼は己をウイリアム・モリスとジョン・ラスキンの結合したものと見てゐた。彼は金持には彼らは如何なる美しいきものを享樂すべきか、貧民には彼らはいかなる美しきものを創造すべきかを、喋つてゐた。彼は百合と日向葵とを藝術家に完全なる喜びを與へるものとして常に携へてゐた。彼は公衆にも、また永遠の存在、偉大なる追憶、美の原理以外如何なるものにも對しても、尊敬をもたなかつた。 (*from Keats*) かゝる態度はかなりゴオチエに感化を受けてゐた。遂にアサ・ランサムのはゆる、「軍帽に百合の花を、鋒先には日向葵の花をつけて戦つた、若い騎士」は、澤山の金を儲けることが出來た。

彼はその金を携へて、新しい芝居の新しい役を演ずるため、巴里にあらはれてきた。もはや審美派の

代表者としてではなく、伊達者として、詩人として社交界に出ていった。評判は豫期の如く大きかった。到るところで歓迎された。彼はもはや美の哲學は宣傳しなかつた。その代り詩を書き初めた。彼はだんだん興奮してきた。ワイルドはバルザックの藝術と天才に感激してゐたので、彼の眞似をして、頭巾のついた上衣をきて仕事をしたり、またトルコ玉の箆ちぢめた象牙のステッキをつきながら、耽美派の紋章のやうな日向葵の花を携へ、ベル・メル街をあるいた。またバルザックのやうに作品の特殊な附屬物が本來の精神をひき起しさうだと感じてゐた。しかし彼はこれまでは「スフィンクス」(The Sphinx)といふ詩集一冊しか出さなかつた。

一八八四年ワイルドは三十歳の折、知名の特許辯護士の娘コンスタンス・メリーと結婚して二人の子供があつた。彼女の結婚生活は不幸であると共に無益なものであつた。かくしてゐるうちにアメリカから携へてきた金はなくなつてきたので、英國に歸らねばならなかつた。そして各州をまた講演してゐた。

彼は珍らしい葡萄酒とあまたの料理の偉大なる鑑識家であると共に、史上まれに見るブリリアントな talker であり conversationalist であつた。彼の聲は低く、リズムカルで、全く樂器の妙音の如きものであつた。彼は常に警句と空想的なバラドックスを使つた。彼はわしはお前のいゝやうに教へてやるのだ、わしのいふことを聞かねばならぬといふ風に喋つた。彼の會話の目的は、信じたことを話すのではなく、機智とか深刻だとか、氣紛れとか、瞬間素張らしいと思つたことを話すのであつた。その度に彼の兩の目はきらきら輝いてゐた。——彼は常にひどく巻煙草を、指がニコチンに染まる程吹かしてゐた。ワイルドがある時、卷莢は完全なる快樂のタイプだと言つたのに乗じて、ある人が、その不快を説いた。

「卷莢は指を染めてその上想像力をけがしますよ」と。詩人は微笑みながら「輕石はいつでもありますからね」と靜に云つた。「しかしそれは全く不必要です。なせ葉巻をお用ひにならないんです」「卷莢を吸ふものには時々變つたのがあるが、葉巻を吹かすものは皆一樣ですよ」と答へた。

そのうち彼にはもはやあの審美的服裝、浮薄な異風は消えていつた。詩人は流行の理髮屋に行つた。そしてルウブルにあるネロの有名な胸像に暗示を得て、彼の長い髪は、熱心に考へられたものにかへられて了つた。一八八九年、Intensions も、サラ・ベルナルのため書き下したといふ *Salome* も「ドリアン・グレイの繪」も「社會主義の下に於ける人間の心靈」も、この頃かゝれたものである。

一八九五の、あの「公の汚辱と長い幽閉、惨めさ、破滅屈辱の運命」をもたらした事の起りは一八八六年、當時彼はもうあの審美學には全くあいて了つた年頃で、丁度英國に於ける文學者の有望なひとりと思はれてゐた頃に初まる。Lord Alfred Douglas が牛津の マウダレン 大學にゐた時であつた。彼は文學青年の文學者崇拜の心持でひとりの男と二人で、ワイルドの家を訪れた。彼は一時幻滅を感じたけれど、間もなく理解しあふことが出来た。そして「逆説が思想界に於て彼に對すると同じ位置を、ねぢけたことが、情の世界に於て彼に對するやうに至つた」のである。

かくして一八九五年、ダグラスの父の Queensberry 侯爵に向つて誹毀罪の訴訟を起して、却つて背負投げを喰はされ、ワイルドの敗訟となり、一時捕へられてゐたが、保釋金を出してゆるされ、遂に再審問をうけて、九五年五月廿五日、有罪二ヶ年の懲役を宣告された。今や彼は破滅へと急ぎつゝ、あるのである。

彼は先づ Wandsworth Gaol に入れられ、言語に絶する程の虐待をうけなければならなかつた。どうもしないのに引きづり出されては罰せられた。彼は泣いてばかりゐた。彼は何物をも進んで食はうとしなかつた。病氣ばかりしてゐた。彼は「自殺せん」と思つてゐた。「一八九五年十一月十三日彼は倫敦から Reading Gaol に護送された。その日の午後二時から半まで、世間の見世物として、獄衣をつけ手錠をはめられて、クラブム・ジャンクシヨンの中央プラットフォームに立たされなければならなかつた。一刻の猶豫もなく獄病舎から、つれ出された。ありとあらゆるものうちで彼は最も怪異なものであつた。人々は彼を見て笑つた。汽車のつく毎に見物は増していつた。彼らの笑ひさうめきにまさるものはなかつたらう。それは勿論彼らが彼を知つてゐない時であつた。彼らは彼と知るや否や、なほ一層笑ひこけた。半時間彼は嘲笑に包まれて灰色の十一月の雨の中に立たせられた。」——獄中では彼は「固い繩を細い填皮 (oakum) に裂か」なければならなかつた。與へられただけの粗麻を必ずよりわけなければならなかつた。また他の囚人とともに、監獄内に水を供給するため、單調な旋盤 (crank) を廻さなければならなかつた。「食ふにも、飲むにも、臥すにも、祈るにも、少くとも祈禱のため跪くにも、冷酷な形式の規則にしばられ」なければならなかつた。お前たちは淨罪界にあるのだとか、早く清淨無垢な身体になつて世の中に出るのだとか、お前らは社會に罪を犯したが、社會は決して罰しようとは思つてゐないとかいふ單調な知つたか振りの牧師の説教をきかなければならなかつた。「板のベッド」、「粗末な錫器」、「黒いバン」、「麻痺せんばかりの不動性」。幽閉された一年間といふものは、どうにもしようのない絶望のあまり、自分の手を引き絞り、『何たる最後よ、何たる恐ろしき最後よ』とばかり叫ぶ外、只何もせず、しても覺えてゐなかつた。泣いてばかりゐた。泣くより外に仕方がなかつた。

嘗ては詩人として、素張らしい毛皮の外套をきこみ、トルコ玉を箠ばめた象牙のステッキをつきながら、堂々としかも悠々と、肥つた圖体を巴里の賑やかな大通にはこぼせてゐたのにも拘らず、獄内に於けるいかに新しい靴を與へる法とは云ひながら、突然看守が入つてきて、容赦なく靴をぬがせ、一言の文句も云はせず、寒さの中に壁に向つて、ふるえながら立たせられてゐる人間の姿を像まがいて見よ。嘗てはブリリアントな話者タウタとして、綺麗に剃つた貴族的な顔を輝かし、緑石の甲虫の箠つた指環に飾られた肥つた白い手をふりつゝ、氣焰をはいてゐたのにも拘らず今や面會人にあふとて、剃刀をあてることが出来ない髯武者な頬を、出来るだけ、赤い手巾で掩ふてゐるさまを、自分の悲惨の様を訴へつゝ、目の前に手をやつて、涙をのみこむ人間のさまを思つて見よ。——いかなる人間と雖も、かゝるごん底の屈辱に堪えることが、出来るか。——『人生の王』とまでまた「詞の主このは」とまで自任した彼ワイルドには、いつたい、いかなるものももち來されたか。

それこそ、彼が出獄近く筆をどることを許されてから、獄中で書いて親友 Robert Ross に送つた「二十フォリオの紙に一杯かきつめられた八十頁」の手紙を、ロスが己の手で整理してワイルドの死後五年一九〇五年に初めて出版された、悲痛なる懺悔録 *De Profundis* の語る所のものである。

然らば彼は、この苦痛と悲哀より、いかなることを暗示され、會得したか。かゝる忍苦から如何に自然を、人生を、藝術を觀るに至つたか。(自分はこゝでその觀照的態度のみを自分の見地より、心理的に發展的に、表はして見ようとする。)

「もし彼がこの前の五月に放免されたなら、彼は己が生を害つたかも知れない苦々しい憎しみを抱い

て、その監獄と凡ての役人を嫌つて、監獄を去つたに違ひなかつた。けれど仁慈 (Humanity) が彼に伴つてきたのだつた。」初めワイルドが「監獄から審問をうけるため、二人の警官に護られながら、公判廷につれてこられる時、彼は手錠をはめられ、頭をたれて、そこ——長い陰氣な廊下を通りかゝつたその時X氏がそこに待つてゐて、大勢の群集の前に恭々しく帽子をとつてくれた。」ことがあつた。彼は非常なる感動を受けた。「あのちよつとした美はしい沈黙の愛の行動は、彼のため哀憐 (Pity) の泉を開いてくれた。沙漠をして薔薇のやうに花さかした。孤獨な世の追はれたものの苦しみから、つれ出して、世の傷き断れた大なる心腸と調和せしめてくれたのだつた。」またかなり後のある夕方であつた。彼ら四人は一日一時間の獄庭歩行 (それはぐるぐる列をなして歩き廻り、一言も喋ることは、禁され、もし喋つた時は、最先に話かけたものは十五日、他は八日の獨禁 (solitary confinement) に罰せられた) をやつてゐた時、彼の後から「オスカア・ワイルド。自分は君が可愛さうだ。君にとつては吾々より苦しいに違ひない」と、ある囚人が言葉をかけた。彼はまたある靈の戦きを感じた。「いや、君、われわれは皆同じことだ」と彼は幽に答へた。——しかしそれはすぐ看守に見つけられて了つて、典獄の前へ呼び出されなければならなかつた。先づその囚人が呼び出された。彼は自分が先に話しかけたから、自分が最初に喋つたと答へた。次にワイルドが呼び出された。彼は同じことをきかれた。ワイルドは「私が最初に」
と答へた。そのため典獄は大に困らされたが、結居二人とも十五日の獨禁に罰せられた。その後彼はだんだん、彼らと話しあふやうになり、苦しむものは、苦しむものを慰さめあふやうになつた。彼は「人間が他人のために苦を受けてゐると、思ふことのいかに悦ばしきか」を語つてゐる。そして彼は「その瞬間から自殺しようといふ望を失つて了つた」と云つてゐる。

人は苦しみ悲しみのごん底にある時に、かゝる些細な好意にも涙の流るゝ程感動し、眞珠の如き尊あるものを會得することが、出来るものである。初めは彼も「悲痛と絶望を措いては何物をも得る」ことが出来なかつた。がしかし今や幽かな愛の光で、苦しみにうち凋んだ野の一輪草は蘇つてきた。いづれにしても彼が悲哀と苦痛の奈落に陥つてゐたからである。畢竟するに「世のあらゆるものをうちすてて」ひたすらごん底より光を——いかに幽かなる光さへも憧れ望んでゐたからである。高慢なる心が走つてゐなかつたからである。彼は云ふ「今や自分は全世界にはいかなるものも意味のないものはない。殊に苦惱の決して意味のないことはないを自分につげるあるものが、自分の心のどこかに潜んでゐるのを知つた。野に捨てられた寶のやうに、自分の心に潜んでゐるあるものこそ、その謙讓 (Humility) の徳である」と。「一切の物を失つて了つてこそ、人は初めて、それを所有せりと識るのである」この温い廣い柔い胸肌とも云ふべき謙讓の徳こそ、凡てのものを抱擁することが出来るものではないか。かゝる態度こそ、人生の觀照に於ける第一歩のものではないか。

しかしながら、心理的に見て、かゝる廣潤なる態度のみであつてはならない。凡てを平凡に受け入れるのみであつてはならない。更に關路に横つてゐる硬き大なる岩をも、見出し、これを除く底の光明がなければならぬ。更に「ヘラの誇飾と孔雀の羽毛」にも、同感する心がなくてはならない。更に、あらゆるものを、かの苦痛と悲哀をも、その柔い胸に抱きしめて、己が灼熱する如き紅い血潮でもつて、それのもつ本來の存在とその價值を直觀せしめる心が流れてゐなければならぬ。その温き血の流こそ、彼の「想像的同情」(imaginative sympathy) であるのだ。それこそ「癩病患者の癩病を解し、盲人の闇を解し、快樂のために生きるものの怖しき悲惨を解し、富めるものの不思議な貧しさを解する」心

であるのだ。「殆んど畏れで満ちた想像の廣濶と靈妙でもつて、言葉なきものの全世界、聲なき惱の世界を己が王國として取り、己が身を以て永劫の代辯者となる」熱情であるのだ。「更に聲を出すべき術を見出さない千萬の人々に對して、それを通じて天に叫び得る喇叭そのものとならんとする」貴き欲情であるのだ。——もしもこの同情がなかつたなら、それは「屠牛の屠牛者に於ける、木を倒すことの森の炭焼に於ける、花の落ちるの鎌もて草薙る人に於けると變らない」であらう。屠殺される牛と、同じ苦しみを感じるこの出来ないのである。無殘にも薙りちぎられる花と同じ苦しみを感ずることの出来ないのである。——凡ての苦痛と悲哀にある人々と、同じ苦痛と悲哀を感ずることの出来ないのである。そこには、もはや「愛の表現」はないのだ。恐ろしく呪はれた罪業があるのみだ。「己が身の上になるいかなることも、また他人の身に起る」といふことを知らないと共に、他人の身の上になるいかなることも、また己が身の上になり得る、といふことを知らざるものであるのだ。他人の苦痛、悲哀を、温かい胸のうちに抱擁して、温めることを識らざるものである。實に「その想像は光明の世界なのだ。その想像的同情は、つまり愛の表現であるのである。」

然らば、オスカア・ワイルドは、あの「聲立て、泣いた苦痛、聲も出ない悲惨、言葉もない悲哀」のなから、辛じて幽かな愛の光で、谷間にさく百合の花の如き謙讓の徳と、赫灼たる太陽の下に咲き誇る、黄色き日向葵の花の如き想像的同情を、會得すると共に、その二つのものを以て、いかに彼の苦痛と悲哀を發展せしめていつたか。

彼は告白してゐる。「從來は全く快樂のために生きてきていかなる苦痛も悲哀も避けてゐた。出來るだけ、それを憎み嫌つてゐた。」「一方笛の音につれて花の路を通つていつた。甘い蜂蜜を食として生きてきた。」「自分は怠けものであり、伊達者であり、ハイカラ紳士であることを自ら快としてゐた。高きにあるに飽きて、新しい肉感を求めんため、ひたすら奈落の底へと陥つていつた。日常の些細の行動が皆人格を作り、人格を破ることであり、従つて秘密の室でしたことも、いつかは屋上に昇つて、大聲で叫び立てなければならぬことを忘れてゐた。」彼は懺悔してゐるばかりではない。彼は悲哀そのものの眞諦に達してゐるのである。余りの苦しさに諦めに達するのではない。「苦痛の中心に秘されてゐる教訓のあるものを了解するに至つたのである。」彼は叫ぶ。「榮華、快樂、成功といふものは木理も粗く、纖維も平凡であるけれど、悲哀は實に天地萬物のうち最も敏感なものである。しかもそれは愛の手以外のいかなる手の、これに觸るれば、必ず出血するやうな傷である。」「悲哀は人間の感受し得る絶高の感情である。」「歡喜と笑ひの蔭には粗惡な生硬な無感覺な一種の氣分が潜んでゐるかもしれない。しかし悲哀のかけには常に悲哀がある。快樂とちがひ、苦しみはいかなる假面もつけてゐない。」「悲哀には一種強烈な異常な實在が添ふてゐる。生の秘密はそれ受苦である。それこそ實に、一切の事物のかけに、ひそんでゐるあるものである——こゝに於て、彼は、悲哀、苦痛、受苦の奥底に秘みつゝ、光つてゐる眞珠の如き、貴きしかも美はしき光を見出すことが出來た。實に「悲哀のあるところに聖地を」見出したのである。

けれども、深き同感 (sym-pathic Mit-leid) をもつて、「悲哀のあるところに聖地を」、苦しみのなかに樂しみを、見出したといふものの、自己、共にまた考ふべき余地が、大いにあるのを觀逃してはならない。自己に對しては、先づワイルドのいはゆる悲哀は、快樂に對にしての悲哀であり、快樂あつての悲哀である。彼が「今迄あまりに己を、快樂に委ねてきた」ことを頭のなかに入れての悲哀である。あらゆる

ものに、なみなみつがれた黄金の美酒にも、戀に酔つた抱擁のすがたにも、永遠に祕んでゐるが如き、かなしみではない。「悲哀は、一切の事物のかけに、祕んでゐるものである」とは云つてゐるものの、彼が「時代の藝術と教養に對して象徴的の關係に立つてゐた」ものであるに比して、今は「自分と一緒に、この監獄にゐるあはれな人間とて、生の祕密そのものに對して象徴的の關係に立つてゐないものは、ひとりもない」といふことを考へての、悲哀である。いつたい、これのみを信條として諦めと安易に陥らんとするところを見る。いはゆる世捨人のごとき態度を見る。——これこそ、やゝもすれば、苦しみのたゞなかにあるものの、陥り易い穴倉であり、かの刹那派、情緒派、神祕派などの、よく逃避せんとする避難所ではないか。

しかしてまた、對他的に、あの想像的同情を、いかに深く、いかに熱く、もつてゐるとも、いまだ十分ではない。いかに癡病患者の苦みと同感することが出来ても、刈りとられる野の草の苦しみに同情することが出来ても、そのみであつたならば、あまりの同情——愛の氾濫に必ずや、溺れ流されるに至るであらう。こゝに、われわれは、あらゆるものに、選り上ぐるはたらきが、澄みに澄んだ川なかの奥底の、眞砂のなかに眞珠を見出しつゝその光によつて川を溯つてゆくが如き思慮が貫かれてゐなければならぬのは當然である。苦痛、悲哀の深淺に應じて、之に相應する態度が、あるべきである。より高き價值、より深き存在へと、踏みつけ進む靈があるべきである。その高きを目あてにして、ある瞬間に於て、全からんとする精神があるべきである。あらゆるものうちに、悲哀のうちにも、歡喜のうちにも、聖地を見出し、それを踏みつけつゝ、しだいしだいに、高き靈の天國に到達しなければならぬ。畢竟するに、かの悲哀も、謙讓の徳も、想像的同情も、われわれの進んでゆく土台に過ぎない。悲

哀そのものが闇路のあなたに瞬く燈ではない。悲哀の聖地そのものが、青海原のあなたに走る白帆でもない。われわれの「心靈は肉体と同じく營養作用をもつてゐて、しかもそれ自身に野卑なる、殘酷なる、屈辱的なるものを、氣高き思想の調子に、高き意味の情熱と化し得る」、ことを忘れてはならない。と共に「己の成就した一々の期待に對して、必ずまたことをぶちこはす別の期待が存して」ゐるのである。

「自己完成 (self-perfection) とは避くべからざる宇宙の法則である。」この自己發展の精神が貫流してゐるべきである。もしいかに努力して進むとも、人間は人間である、不完全は不完全であると、云ふものがあつたなら、かゝるものこそ當然地獄の釜に煮あげられるべきものであらう。故にわれわれは、かゝる光明の道程をすすんでゆくには、最も徹底した「個人主義者」(individualist)とならなければならない。壽くも、培ふも、刈り取るも、皆自己である。決して他人ではあり得ないのである。そして實に「己自身から湧いたものでなければ、いささかの價值もない」のであつて、しかも「自分で自己の形をなす心靈のものに限る」のである。「われに自得したいかなるものも、正しいのである。」己の柔い胸をおしひろげればひろげる程、熱き血潮を脈うたせてゐればゐるほど、自己的となり、しかも他人的となるであらう。この意味に於てのみ、社會主義の精神と個人主義の精神の出発点は同一であつて、自愛と他愛とは、ゆくゆくは一如とならなければならない。(他日詳しく論ずる)

われわれはまた、「自己發展 (self-development) の清新なる様式を求めべきである。すなはち、謙讓の徳」をもつて。深き「想像的同情」をもつて。しかして努力して進むべきである。人生とは畢竟、「自己實現」(self-realization)といふかならうのである。

次にワイルドは、あの苦痛と悲哀のなから、いかに藝術家の態度を、観るに至つたか。その前に、いつたい彼はこのごん底以前には、いかなる藝術に對する態度をとつてゐたか。——彼は *Intentions* のなかでは、『自然は藝術を模倣する』『人生は、藝術が、人生を模倣するよりも遙に多くを藝術に模倣する』(*The Decay of Iyng*) 『すべての藝術的創造は全く主觀的のものである』(*The Critic as Artist*)、こゝを口を極めて叫んでゐる。しかし、この矯激な奇説は、かれの言葉でいへば魅力ある (*fascinating*)、この逆説は、いつたい何を意味するか。——それには先づ彼の生活してゐた、時代を社會を、環境を考へなければならぬ。實に彼の時代は、あの呪はしき物質文明と、あるがまゝを寫し出さんとする自然派、寫真派と、醜惡なる生活と勞働に、みちみちてゐた。こゝに、彼の浪漫的な才能と、浮薄なる性情と、認識の成立を凡て主觀にありとした哲學と、生活の美——理想郷をといたモリス、ラスキンなどの影響とは、彼をかつて、かれらに反撥せしめたのである、彼は「罌粟が真紅なもの、林檎が香しいのも、雲雀が歌ふのも、皆これわれわれの頭のうち」と思つてゐた。云はゞ彼には自然といふものがなかつたのである。従つてものをあるが、まゝに見るといふことなどは、あり得なかつたのである。一方『わが河上を覆ひ、美しく曲つた橋、ゆらゆらゆられてゐる解を朦ろにする、かそかな形にかへる、あのあいらしき白銀の霧』(*The Decay of Iyng*) と化せしむる空想によつて、生活を美ならしめんとしたのである。いはゞ藝術的空想のために、自然(彼はこれを許してゐたやうである)が、美化されて見えるのである。従つて藝術あつて自然があるのである。人生があるのである。そして自然派の、藝術は、人生および自然を、あるがまゝに寫し出す、すなはち藝術は自然を模倣するといふ其信條を、逆説的に云つたものではなかつたか。——彼はまた叫んだ。『快樂は天性の試金石である』『藝術作品は唯一独自の氣質の

独自の産物である』『藝術はこの世が知つた個人主義中の最も深刻な様式である』『藝術家は只ひとり、美はしいものを創造することが、出來て、『もし彼が單にそれを、彼自身の快樂のためにするのでなければ、彼れは到底藝術家でないのである。』『藝術家に一番適した形式の支配は、全然支配のないことである。』『藝術は決して一般的であるやうに試みてはならない。一般公衆こそ、彼ら自身を藝術的にしようを試みなければならぬ』(*The Soul of Man under Socialism*) 『凡ての藝術は役に立たぬものである』つて、『いかなる藝術家も道徳的同情をもつてゐな』(*The Preface, The Picture of Dorian Gray*) きた『情緒のための情緒は人生の目的であつて、行爲のための情緒は人生の目的である』——いづれにしても、これらのつまらぬ彼のロマンティシズムも、エッセテシズムも、深き空想すなはち強き主觀と、醜き生活の美化を高調し、もつてそれによつて、自己發展、自己實現を幽かながらも暗示する意味に於てのみ、われわれの當面の問題となり得るのである。

然らば、彼は、これらの「臆に本能を通じて感じて」ゐた、藝術に對する觀照を、「ド・プロファンデス」に於ては、いかに、その眞諦に達することが出來たか。——彼もまた、藝術家は、藝術家であるよりも、先づ人間であるべきを識つた。人生に對する謙讓の態度は、すなはち藝術に對する態度である。「藝術家に於ける謙讓は、丁度藝術家に於ける愛の單にその肉体その心靈を世に示す美の感に過ぎない如くに、あらゆる經驗を、成心なく受け入れることである」そして「想像的同情は藝術の世界に於ける創作の唯一の祕訣である。』あの温き廣い柔い胸こそ、人生に對すると同様に藝術を育くむ土台である。あらゆるものを抱き込み、温き肌にて温めどかしてこそ、その胸の奥底に脈うつてゐる紅き血潮を通して、自己の本物となし、以てやむにやまれざる表現となるに至るのである。紅き血の脈うつてゐる

潑刺たる生物こそ、われわれの求むるものであるのだ。世界は余りに苦痛、悲哀にみちてゐる。片足ぬいたかと思ふと、片足をつつこまなければならぬ泥沼がある。沈鐘のかなしげな永遠の響がある。「嬰兒の生るゝにも、星の生るゝにも、そこには必ず、苦痛が伴ふのである。」「悲哀が人間の感受し得る絶高の感情である以上、それこそ實に一切の大藝術の典型であり試金石であるのだ。」「悲哀こそ人生と藝術に於ける終極の典型なのである。』

己が胸のうちを一層廣くならしめよ。一層燃えさしめよ。然らば、われわれはあらゆるものを融合することが出来るであらう。必ずそれは表現をともなふだらう。「表現は監獄の扉の上に身を現はし、如何にも休みなく風にゆられてゐる、黒く煤けた木枝に、葉や花の已むべからざるか如きものである。」「その已むべからざる、己の紅き血の脈つてゐる、己の生みだした表現は、己自身であらねばならない。」「藝術と自分自身との間には、更になららの間隙もないのである。」「藝術は人生であるのだ。(このことについて他日くはしく論ずる)——そこにはもはや、自然も人生も、個人もないのである。快樂も悲哀もないのである。決してか的情緒のための情緒も、人間性のための人間性もないのだ。已むにやまれぬ強き心霊があるのみである。——かゝる創造の道こそ、彼の云ふ「藝術的生活」であつて「自己發展」であらねばならない。」「藝術に於ける神祕も」「自然に於ける神祕も」「人生に於ける神祕も」一如となつて自己實現といふところに逢着するのである。まさにわれわれは、かゝる創造の道を踏みしめて進まなければならぬ。自己實現の路を、きりひらいて進まなければならぬ。すれば必ず、大なる力、大なる意志、意志を要することであらう。

自己發展、大なる意力、自己實現——神。そこにはもう莫愁宮サンスイはない。象牙の塔もない。たゞくしく

もダイオニサスが、バベルの塔を建設してゐるのを見るであらう。

かくして苦痛悲哀をへて、初めて人生は藝術であるといふ点に到達することの出来たオスカア・ワールドは、「基督の眞の生涯と藝術家の眞の生活との間に遙に密接な關係を見出し、」謙讓の徳と「強烈な焔の様な空想」を以て、「罪と悩みをば、それ自らに於て麗はしく聖いものであり、圓滿完成の様式である」と見、そして基督に「彼の全生涯は實に立派な、ひとつの牧歌である、」「彼は丁度一つの藝術と同じである」とした。遂に「個人主義者のうちで、至高の位置をとつた、」自己完成の最大なるものとした。

かゝるごん底より「ヴァイタ・ヌオヴァ」(Vita Nuova)を見出した彼は「正しきものにも、正しからざるものにも、等しく甘露の雨をふらす、かの大自然には自分の匿れてもよい、巖陰のあるかもしれない。静寂のうちに、獨り靜かに泣いてもよい、かくれた谷間があるかもしれない」と思ひつゝ、「もし友の一人に哀みがあつて、それを自分に分たしてくれないなら、それこそ實に辛く自分は感じるであらう」と信じつゝ、「自分は多くの人に、多くの謝意を表し、そのかはり先方にもまた自分を忘れないやうにくれぐれも」頼みながら、一八九七年「風にゆられつゝラバナムとライラックが咲き亂れた」五月十九日、戯曲的生涯のクライマックスを過ぎて、北佛ディエツア港近くのベルネバルといふ小さい村へ行つた。

彼はもうかなり寢れてゐた。齒は恐ろしくぬけてゐた。彼はもうブリリアントな話者トウカテではなかつた。警句や諧謔が、たまにあつても、それはこちつけたやうなものであつた。彼は友達に酒代を拂つてくれ

といふ程悲惨であるやうになつた。

それから彼は巴里に住むやうになつた。ダグラスとは相不變交際を續けた。しかしダグラスの道は『アルキピアデスであつて、ワイルドのはアッシシの聖フランシスの道』であつた。

彼は佛蘭西、露西亞、瑞西、伊太利を徨ひあるいた。一九〇〇年の暮、羅馬にゐた時、彼は寫眞を習つて、殆小供のやうな熱心さで澤山の寫眞をとつて喜んでゐた。彼はもう大したもののはかゝなかつた。そのうち彼は一度ならず、七度も法王に祝福をうけた。五月再び巴里にかへつた。

彼は前とは非常に肥つて、ふさふさとした豊かな頭髮は短くかられてゐた。小さい白い藁帽子をかむり灰色の着物をきて、短い外衣を纏うてゐた。兩眼はどんより曇つて顔色は蒼白かつた。人々は彼は怪物でもあるかの如く、ざわめきながら眺めた。『私は生活を知らない時にかきました。今生活の意味を知つて見ると、もう書くことがなくなつたのです。生活はかゝれるべきものでありません。生活は生活するべきものです。』あるひは『私はもう藝術に於ては第一者でありません』と云つた彼の聲は鐘の響きのやうに沈んでゐた。

そのうち彼は病氣にかゝつた。酒をやめないもので、はかばかしうなかつた。それは腦膜炎——シフィリスの後遺であつたことは明であつた。彼は時々ヒステリカルになつたり、精神錯亂に陥つたりした。十一月廿九日、彼は病床にあつて、カソリック教會の洗禮をうけた。翌朝五時半頃、容体は激變してきた。顔付が、變つてきた。喉頭がごろごろ鳴り初めた。それはなかなかやまなかつた。もう光も感ずることは出来なかつた。口泡と血が、たえず口からにぢみ出た。喉頭の苦しうな音は、だんだん大きくなつていつた。一時四十五分、彼は最後の深息をついた。手足は堅くなつていつた。彼の息はだんだん幽になつていつた。——

かくして、かのもつたいらしき耽美派の外套きこみ、彼の戯曲的生涯に初見得した、道化役者、オスカア、ワイルドは、全く最後の幕を閉ぢて了つた。

And with tears of blood he cleansed the hand,

The hand that held the steel:

For only blood can wipe out blood,

And only tears can heal:

And the crimson stain that was of Cain

Became Christ's snow-white seal.

(from The Ballad of Reading Gaol. V)

彼はついに救はれたのである。(二三一六—一八)

(附——これつばかこの紙數を倉皇の間にはたを暫く未定稿とします。引用句は斷がなければ全部彼の言、殊に「」印は全部「ド・プロンマン」から。ロマンの傳記についで、Frank Harris; Lord Alfred Douglas; Arthur Ransome; Stuart Mason; Martin; Contesse de Bremond 等の他を參考にした。それについて色々本を見させて下さつた山本先生に深く感謝します。)

祈 禱

伊 藤 武 雄

昔、或る國に若い王様があつた。神を信すること厚く、民を愛するとも、それと同じやうに深かつた。城の中には、勿論、莊嚴な禮拜堂があつたけれども、法會や祈禱式のある折には、王様はよく、城からかなり隔たつた本山まで出掛けて行つた。それは、廣やかな高い本堂の中で大勢の人達によつて營まれる儀式の深嚴な気分の中に浸ることが、王様にとつては、一層神の力の偉大さを感じる爲めの機縁のやうに感じられたばかりでなく、それは又、其處に集る人民の生活に觸れる絶好の機會でもあつたからであつた。自分達が尊敬し愛してゐる王様の、祝福された健全な御顔を親しく見て、王様の幸福を神に祈らうと思つたら、人民はその本山まで行きさへすればよかつた。

こんなに王様と人民とが互に愛し合つてゐたのだから、或る日、王様の御世繼で御一人子である幼い王子が、御病氣で、而も大變御容態が悪いと云ふ噂が傳はつた時には、人民の驚きと心配とは一通りではなかつた。彼方でも此方でも、人が二人集れば、裏町の溝の傍で泥悪戯をしてゐる子供達までが、必ず王子の御病氣の話をして、一刻も早く御恢復なさることを祈り合つた。そして方々の小さい教會では、王子の爲めの祈禱が献げられ、本山でも何日いっつか幾日に大々的に祈禱式が行なはれることになつた。

人民達は、いつもの習慣で、これから自分達の眼前にお現れになる若い王様が、今日はどんな痛はしいお顔をしておるでにならうかと想像しながら、ぞろ／＼本山へ集つて来た。そして廣やかな高い本堂の中で揺らめく大蠟燭の光と、濃く淡く立ち昇る青い香の烟と、大勢の僧達の唱へる祈禱の聲との中に祈禱式がはじまつても、それから五分経ち十分経ち二十分経つても、彼等が心待ちしてゐた王様の姿が見えなかつた時に、人民達は、愈々王子の御重態に對する動かし難い明かな證明を與へられでもしたやうに、一層深い悲みに心を痛めながら、一層熱心に、まるで自分達の魂を神様の前に投げ出して王子の御身替りにでもならうとするやうに、神に祈つた。式が終つた時、人民はみんなぼかんとして了つた。それは丁度、形態の知れない恐しい怪獸に襲はれた者が、頭の中は逃げやう／＼と云ふ考へで一杯でありながら、足は鉛のやうに重くなつてゐる爲めに、どう／＼追ひつめられて喰ひ殺されやうとしたところ、ふと夢から醒めた場合のやうであつた。それ程彼等の祈禱は、殆ど生命懸けであつた。——

それでも薄暗い本堂の中から晝の光の中へ出た時の人民の心の中には、これで王子の御病氣も必ず治る、と云ふ確かたい自負と明るい希望とが、一杯に充ち満ちてゐた。

餘り大きくない部屋、南側の壁の方に向けて、王子の小さい寢臺が置かれてあつた。其のあたりの窓には、濃紫色の帷が垂れて、外の光を遮つてゐた。その薄暗がりの中に、王様と王妃の青ざめた顔があつた。王様は、政務を見る合間々々には此の病室へ来て、王子の發病以來その傍を離れない王妃と一所に看護をした。心勞と悲みと不眠との爲めに生じた憂鬱な色が、王様の顔と、王妃の顔とを、同じやうに曇らせてゐた。

併しこの父と母との眞心こめた看病も、侍醫達の忠誠な努力も、王子の病氣を治すことは出来なかつた。

すると或る朝、其の病室へはいつて来た侍従長が、王様に、今朝本山で王子の爲めの祈禱式が行なはれたことを話した。

王様は、じつとその話を聞いてゐてから、やがて王子の顔の傍へ自分の顔を寄せて、

「王子や、お前の國の人達が、一生懸命にお前のことを神様にお祈りしてゐるのだから、お前は早く治らなければいけませんよ」と云つた。

が、幼い王子には勿論その言葉は分らなかつた。王子は只昏昏として眠り續けるばかりだつた。

王様はつと立ち上つた。王妃はそれに氣付くと眼を舉げて、

「何方へおいで遊ばしますか？」と云つた。

「禮拜堂へ」と王様は答へた。

「お供致しまして宜しうございますか？」と王妃は重ねてたづねた。

王様は黙つて點頭いたまふ、部屋を出て行つた。王妃はその後につゞいた。

王様はキリストの像の前に、王妃は聖母マリヤの像の前に、夫々跪いて祈禱を献げた。——「………恵深い神様、何卒未だ何の罪も汚れない幼児の清らかな生命をお守り下さい、そして父と母と人民との胸から心づかひと悲みの重石をお取り除け下さい！」——斯う祈り終へて立ち上つた王様は、傍に尚跪いてゐる王妃と、その上にある聖母の像とを眺めた。するとその時、聖母と、その腕に抱かれたキリストが王様の方に輝かしい微笑を送つたやうに思はれた。自分達の祈禱はきかれたのだ、さうだ、き

かれない筈がない、と王様は思つた。自分は義しい神を崇めること、人民を愛すること、毎日怠つたことはない、そして神様は自分に、心正しい美しい妻と、誰でもが將來必ず明君になるにきまつてゐると一様に信じてゐる程清らかな王子と、それから自分が彼等を愛すると同様に自分を敬愛してくれる人々とを與へてくれた。善い事、正しい事を爲やうと望みながら、尙力の足りないことを虞れてゐるこの自分にさへ、これだけの幸福を授けて下すつた義しい神様が、智慧の輝を持つて天國から送られて來たばかりの王子の生命を守つて下さらない筈はない。……

と、いつの間にか、聖母マリヤの顔は王妃の顔に、キリストの顔は王子の顔に變つてゐた。二人の頭上には麗かな日の光が笑ひ、緑の葉は軽い音を立て、踊り、鳥の聲は幸福の歌をうたつてゐる。……王様の眼には歡喜の涙が熱くにじんできて來た。

「王子はきつと治る！」王様は我知らず叫んだ。

「私共のお祈禱は聴き届けられたやうに、私にも感ぜられます。」と、その時立ち上つた王妃も、固い信念に顔を輝かしながら云つた。

王子はきつと治る、さう心に繰返しながら、王様と王妃は、自信と光明を持つて禮拜堂を出た。

それから數時間の後に、太陽が王城の西にある連山の陰に姿を沒したのと殆ど同時に、王子は、短い苦悶の後に、とうとう死んで了つた。明かな意志もなく、只自然の力に促がされて、王子の小さい肉体の中で、死と戦つてゐた生命は、とうとうその戦に敗れて了つた。王様と王妃とすべての人民の祈禱も、人間の力で築き上げた醫術の力も、何の酬はれるところもなしに、死の前に薙倒されて了つた。王

様と王妃の悲嘆がどんなにはげしかつたかは云ふまでもない。それは愛する一人子を失つた人が誰でも知つてゐる。

王子の死去の報が傳はると、人民は強い感動を受けた。彼等の間には、まるつきり王子を見たことのない者の方が大多數を占めてゐたが、それでも彼等は、自分達の尊敬し愛してゐるあの若い王様の子であること、時々何處からともなく洩れ傳はつて來る、王子の智慧の光に照された清い姿との噂によつて、自分達が深くこの王子に結ばれてゐることを感じてゐた。そして自分達があんなにも一生懸命に恢復を祈つたその王子が亡くなられるとは！

「この世の中には、神様なんてものは、本當は無いのでせうか？」と、泉の縁に腰かけた一人の若い女が涙を拭いた。

「それとも私達のお祈禱の力が、まだ充分でなかつたのでせうか？」と中年の女が、骨惜みした者の後悔に似た表情をして、泉から水甕を引き上げた。

「わしのやうな役にも立たない穀潰しは、いつまでも生かしておいて下すつて、神様は……」と、傍で日向ぼつこをしてゐた老婆が、餘計者の感するやうなきまり悪さをもつて云つた。

「大方、天國の親方は、年をとつて、毫碌ちまつたんで、老婆さんと王子様を取りちがへたんだらうよ。」と、其處へ水を飲みに來たパン屋の職人が粉だらけの顔を歪めて神様を罵つた。

「これ、罰當りな、神様のことを、勿体ない、悪口を云つたりして。……王子様は汚れたこの世におゐるでなさるには餘り清すぎるので、神様がお手許へお召しなすつたのぢや。」と、傍を通りすぎた白髪の老人が、若者をたしなめながら、敬虔な眼を天の方に向けた。

誰もその言葉に云ひ返すものはなかつた。が、それは皆がその老人の意見に同意したからではなかつた。自分達にはよく分らない、併しなんだか神様のなさり方が……少し怨めしいと云ふやうな、不満とも云へない程の、軽い波が彼等の胸をさわがしてゐた。

王子が亡くなつてから、王様の心には、埋めることの出来ない深い穴が掘られて了つた。丁度、その一つの結び目を缺で剪られた網がばらばらにほかれて了ふやうに、今までの幸福な調和した世界が忽ち倒壊して了つて、手の下しやうもない廢墟が其處に残された。善い心をもつた王様は、只習慣的に政務を見られる外は、いつも自分の部屋に籠つて暗い考へに耽つてゐた。

「己には何故王子が死ななければならなかつたのか分らない。」と、若い王様は、或る日、自分の部屋の机に向つて日記の中に書き記した。「王子はまだ何の罪も汚れも知らない筈だ。それなのに神がその生命を守つて下さらないとは！ それとも、世俗で『親の因果が子に報ふ』と云ふやうな何かの罪を、己なり妃なりが犯したのであらうか？ 己と妃とが、キリストと聖母マリヤとに祈つた時、己達は己達の祈禱が聴き届けられたやうに感じた。それなのに……いや、あの時聴き届けられない筈がないやうに感じたのは、己の傲慢だつたかも知れない。又己や妃の日常の行爲が正しいと信じてゐたのも傲慢だつたかも知れない。(併し己達は、正しいと信じられない行爲を爲すことは出来ない筈だ。)だが己達の傲慢が、何故子供の上にその裁きを招かなければならないのだ？ 己達に罪があるなら、罰は己が受くべきものだ。……人は、幼くして天國に迎へられた王子の幸福を云ふ。己も昔は、そんな話を信じてゐた。いや、あの王子の死ぬ前までは、それを信じてゐた。併しそれは子供達が、自分の臙げな智慧では、

あり得ることもあり得ないとも決定することの出来ないお伽噺を、信じてゐるのと同じことだ。……今、己にはそれが信じられない、現實の不調和が、そんな都合のいゝお伽噺の魔力を。丁度太陽の前の夜の闇のやうに、吹き消して了つたのだ。——何故、人間には長生するものと天死するものがあるのだ？ 何故、己の王子は(もうあの王子を「己の」と云ふことすら正しくない!)あんなに幼くして死んだのだ？ 己には分らない。只この世の中は恐しく不公平なものだ、と云ふやうな氣がする。」——

「己は今日、妃が一人の侍女と話をしてゐるのを見た。」と、王様はその翌日、日記を書いた。「あの美しい侍女すらも、妃の前では醜いと云はなければならぬ。己は今日、新しい若い秘書官の書いた文字を見た。それに較べると己の文字は羞かしい程拙い。己はまた、窓の彼方で、櫛の大木が他の若木の上に枝を張り擴げて、日光を獨占してゐるのを見る。——己は昨日までは、王子が天死したことが他に又どの類の無い程懸け離れて不公平なことだと信じてゐた。ところが、この通り、何處を見ても、不公平でないものはない。生命の点でも、美醜の点でも、能不能の点でも、この世の中は恐しく不公平な、従つて不完全なものだ。それなのに、己は今迄この世の中を、神が作り給ふたのだから、完全であるべき筈だ、それを不完全にするのは人間が至らないからだ、と信じてゐた。己はなんと云ふ……」——

「己は今日、書庫で埃だらけの小さい帳面を見出した。」と、王様は二三日後の日記に書いた。王様の机の上にはその帳面がひろげられて載つてゐた。「これは誰が書いたものか分らない。澤山の金言が書かれてゐる。己が偶然に或る頁を開いて讀んだのは、こんな言葉だ。『人類生活の理想は、地球上に幸福の國を建てることにある。併し我々の生涯は、常に、萬人の證明する如く、幸福よりも寧ろより多くの不幸によつて充たされてゐたし、ゐるし、又ゐるであらう。してみれば我々現存してゐる人間が一

人残らず死ぬことによつて、次の時代に、より多くの不幸を傳へないと云ふ幸福を與へるのが、最も誠意ある行爲であらう。』——これは恐しい言葉だ。己はこれ程深い人生に對する絶望の叫びを聞いたことがない。……だが併し、己は度々外にも『生きることは苦しみなり』と云ふ言葉を讀んだことを記憶してゐる。己には今は、はつきりこれ等の言葉の感じと意味とが分るやうだ。己も、あの王子を失つた悲みは他のどんな幸福でも償へないと思ふ。この世の中の出來事には、理窟も何も無いのだ。盲目な暴力に支配されてゐるのだ。そして不調和で不公平で不完全なのだ。人間の營みは、そばから破壊されてゆくのだ。惠深い神様、そんなものは無いのだ。只盲目な暴力がすべての生物無生物の上に支配してゐるのだ。人間はどうしてそれと戦つたらいいか分らないのだ。』——

それから幾日かの後の晝過ぎであつた。矢張自分の部屋に引籠つてゐた王様は、誰かが静かに扉を叩く音に、瞑想を破られた。はいつて來たのは美しい王妃であつた。

「お邪魔を致しまして相済みません。この頃はお部屋にはかりお引籠り遊ばしてでございますから、一同御案じ申して居ります。」と王妃は、王様の沈んだ顔色を痛ましげに見た。

王様は暫時黙つて居たが、やがて吐き出すやうに力無く云つた。「何をやる氣もなくなつたものだからね。」

「王子を失くした悲みは、私とても深くございますが、今は、王子も神様のお胸に安らかに抱かれてゐると思つて諦めて居ります。」

「あなたには、それが信じられるからいゝ。だが……いや、己は他人の信仰に懷疑の水をさすことは

しまい。あなたは何か用で來られたのか？」

「はい。少しはあの麗かな日の光の中においで遊ばす方が宜しからうと存じまして、おすすめに參りました。」

王妃は、王様の机の傍に開かれた窓の方へ進み寄つた。青い空には、白い雲の薄い小さい片が、いつとなく浮んで來ては、又いつとなく消えてゆく。遠い高い山々の雪も、今はほんの所々に消え残つてゐるばかりである。色の濃いのは殆ど黒かと思へ、淡いのは黄に近い、濃淡様々の葉の色が、山と野とを彩つてゐる。遠い梨島の中で、手入れをしてゐる男や女の姿が見える。

王妃の背後に立つた王様は、その眩い生々した而も静かな景色を不思議に思ふと同時に、それに牽き入れられるやうな感じがした。王様は、王子が亡くなつてからは、自然も王様の心の中と同様に、暗く息詰つてゐる筈だと思つてゐたから。

「己は馬で山の方へ行つて見やう。」と王様は、久振りで日の光を浴びた木の葉のやうな輝を顔に現はしながら云つた。

「私もお供致します。」と云つて、王妃も急いで窓際から離れた。

「さあ……」王様は、他人の喜びを破壊する者の氣まづさをもつて眼をそらした。「今日は己一人きりで行かう。少し考へて見たいことがあるから。」

「はい。」王妃は、王様と同道出來ないことを淋しく思つたが、それでも憂鬱に閉ぢ籠つてばかりゐた王様が、はじめて外出されやうと云ふ氣になつたのを喜んだ。

王妃は馬の仕度をさせる爲めに、急いで王様の部屋を出た。

王様は、三時間ばかりの間、野や山に栗毛の馬を走らせたり休ませたりした後に、歸路についた。牧場や島には、牧人や農夫が、太陽に焼かれながら、各々の仕事に熱中してゐた。彼等は、疫病や旱魃や暴風雨や、様々の災厄と戦ひながら、一生働き通して、恐らく極僅かの快樂さへ得られないで死んで了ふ。「哀れな人達よ！」と王様は考へた。

王様は、小高い丘の上に馬を止めて、町端の貧民窟を見下した。其處には恵少なく生れた人達が、他人の間の快樂の爲めに苛使こきつかはれながら、しかも食ふ物と着る物すら充分に與へられないで、蒼ざめて顛へてゐる。

「哀れな人達よ！」と王様は嘆息した。

王様の馬は、丁度人通りの少ない町端の大きい教會の前を通り過ぎた。王様は、ふと頭を廻らして、薄闇に充たされたその建物の中に、小さい蠟燭のゆらめいてゐるのを認めた。王様はその神秘的な光に誘はれて、丁度信仰を持つてゐない者でも崇高な宗教畫の靜かな力には感動うたれるやうに、その中へはいつて行つた。

壁際の、聖像と使徒達の畫像の前には、小さいお燈明が燃えて、それ等の前の、其處此處に跪いてゐる四人の人達を照してゐた。一人は老爺で、一人は老婆で、他の二人は年若い美しい女と、その男の子とであつた。王様には彼等の祈禱が何を意味してゐるかは勿論分らなかつた。が併し、すべての物の形を廳に融け合はして了ふ薄明の中に、震へてゐる淡い光を浴びて隠れたり顯れたりしてゐる畫像の前に、聲もなく跪いて謙虚な魂を投げ出してゐる人々の姿は、王様にも悲しい感動を與へた。それは太平洋を見、高山を仰ぎ、又は深夜の星空に吸ひ寄せられる場合に感ずるやうな、無窮と云ふ感じを人に抱

かせるものであつた。がそれと同時に、それは又、人間の弱小、人間の無力を感じさせるものでもあつた。——王様は、この靜かな繪の傍に、誰にも氣付かれずに、一時間近くも立つてゐた。

彼等は何を祈つてゐるのだ？ 何ものに向つて祈つてゐるのだ？ 彼等は、彼等が祈禱を獻げてゐるものは、自分の意志で與へることも取ること出來ない盲目な暴力であることを知らないのか？ 彼等は、彼等や己達の祈禱が王子の上に酬ひられなかつたことを忘れて了つたのか？

「哀れな人達よ！」と王様は呟いた。そして教會を出て馬を城の方へ急がせた。

或る日——それは王様が町端の教會へ立ち寄つた日から半月ばかり後のことであつた——人民は不吉な報知によつて、新たな驚きと悲みとを味はされた。王様が御病氣だ、大變お悪いのだ、と云ふ言葉が耳から耳へ傳はつて來た。

「わしが確かな筋から聞いたところによると」と一人の物知顔の男が、本山の前の街通りの一個所にかたまつた大勢の人達を見廻しながら云つた。「王様は半月ばかり前に毎日夕方になると町端の教會（と力を入れて、王様が本山へ來ない非難の意味を含ませ）へ行かれたのだ。ところが一週間ばかり前の夕方、其處からのお歸りに、そう、あのひどい土砂降りにお遭ひなされたのだ。お供の者もなく、お迎へる者もなかつたので、王様はぐしよ濡になられたのだ。今度の御病氣はそれが原因よなのだ。」

「それでなくつてさへ、王様は王子様の御看病で、御無理な御身体の使ひ方をなされたさうだし、その揚句王子様がおかくれになつて、ひどく御力をお落しなすつてゐらしたさうだから……」と一人の老人が獨語のやうに説明を附け加へた。

「なにしろ早くお治りなさらないと困る。勿論侍醫の方達が充分の手をつくしてゐることだらうから、我々は、杳かに王様の爲めにお祈りするより外はない。いづれその内に本山でも御祈禱式が行なはれることだらう。」と、前の物知顔の男が、もう一度自分の右左の人達の顔を眺めながら云つた。

彼等の豫想通り、果してその二日後に、本山で王様の御病氣御平癒の祈禱式が行なはれた。彼等は、この前彼等の祈禱が王子の上に酬ひられなかつた苦い經驗を持つてゐるので、今度こそは、是非とも、神様に祈禱を聴き届けていただかなければならない、と云ふ凄じい勢をもつて、本山につめかけた。若し今度も彼等の祈禱が聴かれなかつたら、彼等の國は如何なるだらう！

廣やかな高い本堂の中に充ち溢れた人民は脳髓の中心の一点へ頭をもみ込んで了はうとでもするやうに、一生懸命眼をつぶり、合掌した手を額へおしつけながら祈つた。——それでも彼等は、式が終つた時、まだ彼等の祈禱が充分でないのを虞れてゐるかのやうに、不安げな眼眸をもつて、丸天井の下にゆらめいてゐる大蠟燭の光を見つめた。

王様は、嘗て王子の病室であつた部屋に、王子の寢臺が置いてあつたのと同じ位置に、寝てゐた。王妃が、この續いて起つた悲しみの爲めに胸をおし潰されながら、一層の熱心をもつて看護につとめたのと、侍醫達が懸命の努力をもつて王様の病氣と戦つたのとは、勿論のことである。併し王様の容態は、不思議なことには、一寸も快方へ向はなかつた。侍醫達も、無論、王様の心身が極度の疲憊に陥つてゐることは知つてゐた。が、それにしても、平生壯健であつた王様が、これ程衰弱して了ふと云ふことは、誰にも合點のゆかないことであつた。そこで侍醫者は、王様の容態が、恐らく彼等には分らない何か精神

上の苦しみに影響されてゐるのではなからと推測した。その話を聞いて王妃は、王様が御發病前に四五日續けて、一人きりで夕方町端の教會へ行かれた事實——それは王様から御發病後初めて聞いたのであるが——を思ひ合せて、それを王様に質したと思つた。そしていつも王様の、頬のこけた、眼の窪んだ、髻の延びた爲めに一層の青白さを増して見える痛々しい顔を見つめながらも、慎重な心づかひから、その機會を未だに見出すことが出来なかつた。

丁度、本山で祈禱式のあつた日の正午頃、侍従長は王妃に、人民が王様の爲めに必死な祈禱を献げた話をした。王妃は黙つて點頭してゐた。

するとその中に、不思議なことには、王様の閉ぢられた臉の間から、涙の粒がにじみ出て來た。じつと王様の顔を見續けてゐた王妃にはなんで王様が泣いたのか分らなかつた。ことによると、この何でもない話までが王様の神経にさわるのかと思つて、

「如何遊ばしました？」と、王妃は、思はず自分の手巾を取り出して、王様の眼の上にあてた。

「何でもない。」と王様は、暫時してから云つた。そして大きな眼をあけて、面やつれのした王妃と、次に年老いた侍従長と、それから一樣に心配に青ざめてゐる侍醫達や、お附きの者達の顔を見廻した。そして王様の眼には一種異様な表情が閃めいた。が、忽ちその眼は閉ぢられた。そして新たな、玉のやうな涙の粒が、その臉の間から流れ出て來た。王様は頭を横に向けて、蒲團の襟に顔を埋めた。王妃やその他の人達には、これをどう解釋したらいいのか、分らなかつた。

それから又十日ばかり経つた。王様は自分の部屋の、窓の間に置かれた机に向つて腰かけてゐた。青

白かつた頬には、また若々しい血の色が甦りかけてゐた。そして眼には、今迄に見なかつたやうな、強い、生々した輝があつた。廣く開け放たれた窓の彼方には、日光の中に燦爛として揺れ動いてゐる高い檜の木の小梢があつた。

「己は一昨日まで床に就いてゐた。」と王様は日記に書き加へた。「己は二十日間近く寝てゐた。が本當はこんなに長く寝てゐなくとも好かつたのだらうと思ふ。己の心に、病氣に克たうと云ふ氣さへあつたら、俄雨の爲めにほんの一時濡鼠になつたことや、又それ迄の心身の疲勞などが、いつ迄も己を病床に縛りつけておく力などはなかつただらうと思ふ。ところが己は、以前の日記にも書いた通り、あの頃は、生きてゆく頼りを失つてゐたのだ。己は人間の眞剣な祈禱も無駄なのを知つてから、神を信ずることが出来なくなつてしまつた。己は、到る處で、この世の中の不完全と不公平とを見た。己は、心の正しい人々が正しい行をし、正しい祈禱をしながら、それでも酬ひられるところの少ないのを見た。己は、人間の力が盲目的な暴力の前には無力にも等しいのを知つてゐる。己は、どうしたらいいのか分らなくなつた。生きてゐる必要があるのか、死んだ方がましではないのか分らなくなつた。己の眼の前には、あの小さい帳面に記されてあつた恐しい言葉が、火の文字で書かれてあつた。だが己は、強ひられるから、黙つて薬は飲んだ。そしてその後で直ぐ又、暗い絶望に胸を掻き濁されてゐた。

「ところが、あの日に己は、侍従長が妃に話してゐる言葉を聞いた……人民が己の爲めに必死の祈禱を献げてゐる、と云ふ。——己の眼前には、王子の死後初めて外へ出た日に見た哀れな農夫や牧人や貧民達が大勢、丁度その同じ日に町端の教會で見た人々——己はその後四五日續けて彼處へ行つた。それは勿論信仰の爲めではない、「薄闇の中に祈る人々」の繪に牽きつけられた、一つの美的な心持に過

ぎない、そして第一日に見た男女の老人と若い母と幼い子の印象は、それから後の日に見た人々の印象にまさつて深い——のやうな姿で、本山の薄暗い本堂の中に跪いて祈つてゐる有様が、はつきり浮き上つて來た。己はその時、今でも明瞭に思ひ出すことの出来る程強い異常な感動を受けた。眼を開いて見ると、周圍には妃を初め、他の忠誠な人々の憂はしげな、祈つてゐるやうな顔がある。己は、どうしてその時迄己以外の人達のことを考へて見なかつたのか不思議な氣がした。……己は人々の祈禱を無にしたくないと思つた。己は生きやうと思つた。生きなければならぬと思つた。……己はその時知つた、祈禱は、祈る者の誠心が、祈られる者に通じて、その者の心を動かし、振ひ立たせ、元氣づける場合にのみ、その靈驗が現れるのだ。神様が聴き届けるのでも何でもない。己の場合の侍従長のやうに、祈る者の誠心を祈られる者の魂の中に植ゑつける媒介者が必要なのだ。それが祈禱を効果あらしめるのだ。「己はそれ迄餘り獨斷的に、人生と人間の力とに絶望してゐたのだ。餘りにこの世の中の不完全と不公平の前に打ちのめされてゐたのだ。己は愚かだつた。己は何故「生きる」とは苦しむなり」と云ふ言葉の然立たなかつたのだ？ 不完全と不公平とを、完全と公平とにしやうと努力しなかつたのだ？ 人間の生命の尊さが其處にあるべき筈であるのに！

「人間を無力だと諦める者は、禍である。その者はキリストを忘れたのだ。己は最早キリストを神の子だとは信じない。盲目的な暴力——特に人間の内に潜んでゐるところのそれ、即ち惡——と戦つた、人間の中最も尊い最も勇敢な戦士として彼を崇拜する。キリストは神から來たものではない。謂はばこれから神を築かうとした者なのだ。キリストは初め、神の國を地上に建設しやうとした。併し餘りの惡の根

強さに、だんぐ神の國をあの世へ遠ざかせて了つたのだ。併し、あの世などと云ふものは、信じられないものには、どうしたつて信じられない。己はキリストがあの世へすらせてしまつた輝の國を、人間の力——全人類の生命の中に据ゑ付けられた——で、この世へ引き戻したいと思ふ。己は、神を信じない。己は、盲目な暴力と戦ふ人間の力を信する。……」

その時扉が叩かれた。老侍従長がはいつて來た。

「只今本山からお使者でございまして、陛下の御病氣御平癒の感謝祭を舉行致しまするに付き、下々の希望もございまして、親しく御臨幸を仰ぎたく存じまするが、何日頃なれば御差支へございせんか、承りたい由にございます。」

「あゝ。さうですか。今度は人民も御祈禱の仕甲斐があつて喜んでくれるでせう。」と若い王様は、侍従長の美しい白髪頭を眺めて、ペンを置いてから、一寸考へて、つと自分の指にはめてあつた指輪の一つを抜きとると、それを彼の前へ差し出した。

「これはあなたへの御禮です。人民の熱心な祈禱も、あの時あなたと云ふ報告者があつて、己に知らせてくれたのでなかつたなら、今度も無駄だつたかも知れないのだから。……それから使者には、感謝祭は何日でもいゝ、己の代りに妃に行つて貰ふから、と答へて下さい。分りましたか？」さう云つて王様はくるりと机の方へ向き直つて、又ペンを取り上げた。

「はあ。」と云つたさきで侍従長は、狐にでもつまゝれたやうに、茫然としながら、恐る恐る王様の前を引き退つた。掌の上に置かれた貴い指輪を怪訝さうに眺めながら。

王様は、杳な眼で、青空の一点に、じつと見入つてゐた。(終)

つ　ゆ　空

藤　田　貞　次

裏町ながら、かなり人通りのある通りが、横町に曲らうとする角に、三坪ばかりの三角な空地があつた。いつもは佛教講話や政談演説や活動や、いろ／＼のビラが貼られたり、時にはホースなどが——そばに消防の小やがあつたから——乾されたりする場所であつた。五月初めの或日、ひよつくり、そこに小やがたつた。急ごしらへのガラクタな上に、一坪ばかりの箱みたいな狭いもので、通りに向つて、高く店臺が作られてあつた。なかはた、み一疊、ようようしかれるぐらいで、その主人らしい男が、前こゝみになつて、しきりにコン／＼と釘を打ちつけてゐた。ときどき其音が突つ拍子に高く聞えた。

その翌日の朝早く、小やの店台には、てんぶらをいれた箱が三つならんでゐた。ガラスの蓋は焼たての湯氣でくもつてゐた。三十がらみの女が、昨日の男といつしよに、朝の光にかゞやきながら、小やのなかで働いてゐた。顔には、今までの苦勞からのがれ、この商賣でひとつもりかへしたいといふ決心が、開店の喜びとまぢつて見えた。

工場通ひの職工や女工が、好奇の眼を、おつびらに投げては通つて行つた。小學校の子供が……てんぶらあります……と、聲高に讀んで行つた。それを見たり聞いたりする二人は、心も落ちさうに喜びあつた。嬉しさに、女が男の顔をちらつと見ると、男もあふれるやうな笑顔をしてゐるので、女はまた笑つた。すると男も亦笑つた。こんな幸福がまたと世にあらうか。……

開店のときは、どんな店でも安いにきまつてゐると、知りぬいた女たちが、赤子をおんぶしながら、

買ひにきた。そんな女たちは思ひ切りたくさん買つて行つた。知り合ひの女と、店先きで落ち合ふと、
 わるびれもせず、開店の祝ひやら、店の出し工合のうまさやらを、ペラ／＼としやべりちらして行つた。
 二人は出来るだけの愛嬌をふりまいて、そんな會話に加はつた。

子供が三錢ほど持つては、買ひにきた。食ひながら、店のそばをはなれようとはしなかつた。それで
 店のまはりには子供らで二ばいであつた。學校が退けると、子供らはすぐにこゝに來た。店のまはりには子
 供らの遊び場所となつた。いろ／＼の遊びが行はれた。

夕方から夜になると、工女たちが、歸りがけに、立ち寄つては買つて行つた。上品さうな家の内儀さ
 んも買ひにきた。珍し好きの中學生なども、恥づかしさうにして買ひにきた。女はこんな客を逃がして
 はならないと、思ひきり愛嬌をふりまいた。つまらん店に、こんな人が買ひにきてくれたと思ふと、女
 は氣もおちつかず、そは／＼するのであつた。三十錢のところを、一圓札で渡されて、七拾錢、釣りを
 渡しながらも、客が店を去ると、五錢貨を十錢貨に間違へやしないか、いや間違へたらしい、……そ
 んなことをしてはすぐに店の信用がおちる……と思ひこんで、あはて、客のあとを追うて駈け出し
 て行くこともあつた。

よその店がしまつても、なほ遅くまで、店をあけてゐた。二人が向ひあつて、賣上高を勘定するとき
 は、これくらい、幸福な家庭はないと思はれた。

二人は文字通りに、朝はやくやつてきて、夜おそく歸つて行つた。てんぶらはよく賣れた。

かうして、青く晴れた五月も終つて、六月に入つてからは、晴れもせず、……と言つて、降りもせ
 ず、壓へつけるやうないやな天氣がつゞいた。客もだん／＼と減つて行つた。通る人も殆ど店先で足を

止めてくれなかつた。ひつそりとした小やのなかに、何かあるかと、ちらつと横眼で見ながら、すぐほ
 りしてゆくやうな人が多かつた。そんな、げやりな視線を見ると、二人は悲しく思つた。見合はずたび
 に、互の顔の寂しさが、一そう二人をさびしくさせた。

いよ／＼、曇つた空が熟して、細い雨が、腰をおちつけて降り出した。やはらかい裏町通りの土は、
 丁寧にはぐされて、ごろ／＼になつた。なげやりではあつたが、せめてもの慰めであつた人通りが、め
 つきり減つてしまつた。勤め以外の人は殆ど通らなかつた。箱にいられたてんぶらは、いつまで待つても、
 なくならなかつた。たまたま客がきて、蓋をとると、てんぶらはちつとりと濕つてゐた。女は氣兼ねしな
 がらも、捨てるのが惜しくて、紙袋に包んで渡した。そしてホツとした。また寂しい氣もした。

二人は賣るよりも、向ひあつて、芋を洗つたり、切つたりしてゐる方が多かつた。さびしい雨のなか
 に、ちつと閉ぢこもつてゐるのはたまらなかつた。二人はこれではならぬと互におもつた。そこで、鮎
 の佃煮を作つて、離れてしまつた人の心をとりかへさうとした。……佃煮あります……と大きな紙
 がはりつけられた。子供らはもう聲高にはよんでくれなかつた。見ても口のなかで、ブツ／＼言つて、
 どほつて行つた。佃煮の一ばい入れられた二つの箱と、てんぶらの一ばい入れられたひと箱とが、並ん
 でゐた、——いつまでも。二人は見るに堪へられないで、狭いなかで、向ひあつて坐つてゐた。二人は
 ろくに物も言はず、互に甲斐性がないのだと思ひあつた。怒るにはあまり馬鹿らしく思つた。

二人の店にくるのが、だん／＼おかれて行つた。店はだん／＼早しまひになつて行つた。二人はそれ
 を知つてゐた。が、どうにもならなかつた。つゆはだん／＼あけてきた。が、二人は、つゆのあけるの
 も待たずに、どうどう店を閉ぢてしまつた。

春より夏へ

大野正

人聲におどろく山の春浅き
 木蓮の空にかげもつ月夜かな
 日まもとの人影さみし立葵
 雨こぼる空の明るさ花消なん
 遠屋根に夕日かゝりをり春大風
 潮風の眼路かすめゆくは花菜かな
 烈風の薊すみきる草の中

標林春光の波うてるかな (車中)

春の夜の蔓の光りねむりたし
 夕焼の地をとぶつばめ土喰むな

雲に雪影をとじて夏に入る山か (白山遠望)

蛙きくや屋根をおす月寒からめ (病床)

涼風や灯影をはじく芒の葉
 大霧のほたるしづけき波上かな
 月をつる暗さ四葩を壓しけり

詩 二 篇

大 澤 衛

積まれゆく煉瓦

朱い毒々しい煉瓦が積まれてゆく、わたしの目の前に、
 ひとつ ひとつ しいだいに積まれてゆく、わたしの目の前に。
 恐ろしさにもぶるひする、くやしきにもぶるひする。

やうやく森と野と地平の 見透しが利くだけの背になつたと思つたら
 どうしたことだ、わたしの視野の前に 毒々しい壁ができるのだ。
 煉瓦はひとつひとつ しいだいに 積まれてゆく。はらだたしさに歯を喰ひしぼる。

地平のほからかな色と 天際のみごとな静さを
 たのしみ見たのも もう遠い夢になつたらしい。野ももちろん見えなくなつた。
 あしたは あのわかかわかしい森の梢も 壁に隠れるだらう。

めくらになつた友

(盲啞学校の寄宿舎で)

厚紙に突出た小さい澤山のこみ入つた点を
 震へる手で 蒼白い手で 觸りながら
 點字の解剖學教科書を
 讀んできかしてくれた君をみたとき わたしは涙が出た。

「座頭の社會は開けてゐるからね、
 をんなとの交際もすこぶる自由だよ
 目が見えないから 顔はわからない、
 顔がわからないから 美しいかどうかわからない。

美を知らぬ社會では 美しい蕩し合ひはない、
 美しい騙し合ひはない、その代り
 めしひた選擇がある、ほんとに自由な選擇がある、
 けはいと吐息の直感で みんなおもひ合ふんだ。」

かう君がえんりよなく話して

見えぬ目をわたしに向け乍ら笑つたとき
わたしは また涙が出た、

——目を奪はれた社會は なんと IGNORANT なのだ——

「座頭は 艶書を開き封で出せる、

點字の書きものは立派な印刷物だからね、

目の見える社會の郵便局員は 開き封でありながら、ほんとに惜しいよ、
この絶大の興味を 覗いてみようともしないのだからね。」

君の聲は華々しかつた、唇の色はしたゝるやうだつた、

わたしはもう涙が出なかつた、そしてほのかに笑つてゐた、

——目を奪はれた社會は なんと OPTIMIST なのだ——

わたしの頬の涙も 笑も 君は恐らく知らないことだらう。

——二五八三年 五月——

断章

岡 良 一

また會へずなりし人のしきりにおもひいで

こよひ わがみ寂しくてならねば

たゞひとり 野をわたり

水沼のほとりに來たりぬ

この水沼をめぐりては

まつ すぎ ひのきなど

これ等の樹林は葉の繁みとけがたく

ひとすぢの月をだにゆるさぬ闇にて

ものゝ陰にしのび生ふる植物の

かのしめりたる肌のごときにはひ

ほのかに たゞよひながれ

こよひ六月なれば わが身すでに濡れほそりたり

魚族みな水沼のそこひにしづみはて

たれとしておとなふるものなき水のおもてには

月かげ ひとりみだれすつゝましき女のごとくうかびたり

げにやさしくもおとなへるものかなとおもへば

おのが いまみなそこにあるこゝちして

またかなしみ しのびがたくおぼゆるなり

すぎし日のわれ

かのえいぶごにて織りなしたる

おくつきのまへに よろひ人あまた

つるぎ持ち 盾をもちてたゞかひたる

いとも色さび えがかれたるきぬをほしと言ひしに

はたちにもみたぬ身にしてとわが母の笑ひたるが

あゝ われ

まことしたしきものをうしなひて

人の世に老いゆくわが身を知りたるごとし

老いゆくわが身 身にしみてかなしくあればこそ

かくはひとりみ 沼のほとりにたゞよひきたり

うつりゆく月影の見分かずくもりゆくものを

II

ひと夜をしたしき友のふたり

わがこのかひがらのやうなる部屋にいさかへば

われひとり せんすべもなくて もだしはてつ

壁の上にふたりの影をながめたるなり

その影あやしく 手をあげ 身をふりうごかして

ひしがむとするもののごとく

あるはまたうなじかしげて

ものおもひしづめるかたち

さらには鬼のごとく あるは手をにぎりあひ

そのふしぎなるかたち ふゐるむのごとくつゞき行くなり

あゝ われ等の生るゝ時よりわれ等にしたがひて

われ等墓穴によこたはるとき
いづくに消えはつるや 影よ
なんぢ かなしき生命の微行者

そのすがた

かの黒衣着てもの言はず世を終ふるてふ行者のすがたか

あるはまた 罪業のふかきにあまり 萬劫の沈黙に封じられたるものか

さりとは 影よ

なんぢ その無表情によりて

いかにすぐれたる道化者なるかな

III

あまねくゆたかにあふれたるひかりの けはしくかたむける寺院
のかはら屋根にはんばつしたるさま 樹の間／＼にうちかゞやきて
こゝいくうねの墓丘をとりまく樹立の中ではおさない少年たちの
自由ののびやかなるこえこえがぶえんりよなるひとときのこだまを
よびかはしてゐる

そのはつらつたるにぎはひをはなれ こゝの樹影 うまれいでし
ときのむすびやうもてくちびるむすび たゞひとりたちたる石地藏
の いかに石にぎざまれたやうなるまぶた はな くちびる ひ
たへには 葉もるゝ西陽がせんさいにふるへてゐる

そのときひとりのいたいけなる少年がこのいしぼどけにちかより
はじめはやぶれたるまへだれ あるひはくびからはらにかけてはび
こりまつはれる地衣類をもてあそびゐたりしが やがて そのくび
すぢにだきついて 兩の足をこしのあたりにかけてよじのぼりま
るまるなめらかなるほどけのいたゞきをなでむものと かた手をあ
げたのであつた

ひとりあゆめるもの ものおもひしづむるこゝろにも みづみ
づしいわかかしさを感しながら 樹立にそへるほそ道つたひに
はかにおさなきものごもの異様なるこえこえはこゝろおびやか
道なきくさむらをふみこえふみこえ やがてさけびおこりしひとむ
れにあゆみよりしとき あゝわれ かなしき小景にこゝろうたれた
のである

よこざまに地によこたはりをる石地藏と 地藏の肩にくびおさへ
 られて そらむくさま たふれふしたる少年のいきたえしすがた
 ほどけを負ひてまなこどちたりし少年のゆびゆびは なほかたく
 いろあせしまへだれのひどはしをにぎりしめ そのいしぼどけは
 なほもの言はぬ石のおもてもて そのむねに兩手のたなごゝろつゝ
 ましゆげにあはしつゝ あかあかと西陽あびてまろびぬたりぬ

盲目の女 (二幕)

坂田 精一

場所。 山中の小さな温泉宿

時。 夏の末(山の下は未だ少しく残暑に惱まされて居る頃。)の夜

人物。 炭坑から逃げて来た男二人。

甲。 二十四五歳、色は黒いが目がくぼんで余程曇れた面色

乙。 二十歳位、病身らしい男

宿の老主人

宿の老家婦

盲目の女。 お豊 (二十才)

避暑客。 鈴木と稱ぶ男(二十五六。 中等學校位は出た様な男)

同宿の女。 春子(十八位、まるぼちやな、快活な質)

場面。

一体に煤けた感じのする宿の帳場。

洋燈の積すんだ灯に奥の方は僅かに鑼詰を積み重ねた棚だの、魚の乾物、蕨、乾栗、杓子のつり下げられたのや柱時計や

廣告の繪紙箒ぼんやり見える位なもの。その邊りに待ちくたびれたお豊時々髪を撫でたりし乍ら所在なき相に坐つて居る。左端は奥まで土間になつて居て下駄箱、芥取り、五六足の下駄等が無頓着に置かれてある。その土間に、つきあつた最も上等らしい部屋の壁を切つてはめた六角障子が割に上品な落ち付きを見せて居る。前方は月光の爲め稍明るく二尺程の條に終つて居て其處に餘程疲れたらしい二人の男腰かけて居る。

男、乙 穿んだ手拭を口でびりつと裂き乍ら切れた草履の緒をゆはいて居る。時々咳をする。

男、甲 茶碗を膝の邊りに持つて来て何か考へ込んだ様に凝乎と乙の手つきを見詰めて居る。

二人とも緒がゆはいられたら、もう立たねば濟まないさ云ふ心に驅られ乍らも、その間を享樂するかの様に息を靜まらせて居る。條に近い右端に長火鉢が置いてあり、宿の老主人が仕方無き相に火鉢の火をのぞき込み乍ら煙草を喫んで居る。暫時所在ない沈黙。

只家の横の樋から、せ、らぎに、流れ落ちる水音が夢の中に彷徨するかの様に、如何にも山の中らしい深遠な感じを與へるのみである。

暫時の後。煙管の灰をほつと吹き落し、煙草をつまみ乍ら仕方ない様に沈黙を破る。

老主人。さうか。ぢやあ春江澤の方の山路を下りて來なすつたんだなあ。

男。……

老主人。さう言へば此の上の湯、通つて來なすつたらうが山一つ越えて丁度大田切の崖の天頂にある。燕つて所だけに山燕の馬鹿に多い所だ。俺も随分こと行つて見ねえが。如何だつたかねえ。彼處も矢張り淋れたものだらうなあ。何んと言つても時期が時期ださかねえなあ。

男。(頭をもたげる)。

男、甲。さあ。……如何んなでしたか。(今更乍ら元來た路を思ひ出す面色。乙の顔を見ながら) あんまり客らしい人も見えなかつた様だなあ。

男、乙。うむ。(三つ四つ咳の下から大儀さうに答へる。べつと痰を吐く)。

老主人。矢張り、さうだらうなあ。ごだい山の壽命つたら短いものさねえ。……それでも七月から八月にかけてお客もたんと入り込んで來る。お山参りの若い衆や藝者を連れた避暑客やらで俺達や婆あ

さんの寝る所も無い程なんだが。三日にあげず藝人衆が廻つて來るし素性の知れぬ女共迄入り込んで來る。毎晩々々湯上りの男女が熱い顔を風に吹かせ乍ら入り亂だれて躍る。……當座は毎晩たつた盆躍りの太鼓が耳について仕様がなかつた位さねえ。

老主人。だが盆時分になれば町の衆は大方歸つて失ふ。それから亦近在の人で如何にか賑ふんだが田舎の人は皆三四日の當座客だし。少しでも涼い氣に向つて見な。森閑したもんだ。

かう急に淋しくなると何んだか氣ぬけがして失ふなあ。(苦笑する)。

男。はあ。(外を見廻し乍ら仕方ない様な苦笑をする)。

老主人。これから、もう不可ない許りだねえ。冷めたい風や霰。それは、まあ好いが雪となつたら、もう往生だ。二十日位はぶつ續けに降りやがるからなあ。此の邊の雪と來たら有名なもんだ。さうなつたら一日中湯に浸つて居るんだが、その中に樋が破損む。水が漏る。湯が冷めなくなる。樋を修繕するたつて雪で如何する事も出來んしなあ。

老主人。此の湯場へ入る路の脇に小屋があつたらう。樹伐さの家なんだが、そこなんざあ親父が湯まで道をつけて居る間に家が見えなくなつたんで此處中總出で漸く竿で上部から突き當て、掘り出したんだが中で嬬あど小供が泣いて居たつけ。……宛然、嘘みたいな話しさなあ。なあ、お豊さあ。

お豊。(顔を上げ、うなづき笑ふ)。

男、乙。本當に此地は雪が降りますねえ。(目を瞑り乍ら)俺はもう此地方の冬が恐しくなつたんだ。すつか

り身体を害めて失つたから。

(亦暫時仕方の無い沈黙。)

老主人。お豊さあ。火鉢の傍へ來な。婆あめ。何時まで何して居るんだらう。

男 甲。もう八時ですなえ。

老主人。あゝ。

男 甲。此處から下まで何程あるんでせう？

老主人。下村まで？。(乙息をひそめて老主人を見る) さうさ。三里と言ふんだがねえ。尤も下りだけれども。

……………如何しても出かけるかねえ？。

男 甲。はあ三里……………。

老主人。三里と言つたら本當の山中の三里だねえ。あの一本杉を越えたら、もう芒々の藪だけだ。尤も三分の二程行けば茶屋があるが夕方になれば戸閉りして下りて了ふし、一体蚊や蠅子で歩かれたものでないんだが。

男 甲。實際蠅子の多い所ですなえ。今朝から八里も、かけすつたが此の通り血だらけだ。ふふ(ほりくかき乍ら) 蠅子の食つた痕でぶくくして居る。

老主人。うむ。それは不可ねえなあ。ぢあ湯にでも入つて行くと好いのだが。蠅子に食はれたら湯に入らな、いつち、功いからなあ。

男 甲。はあ。

老主人。悪い事は言はねえ。

男 甲。有難たう。(乙を見ながら) 如何しやう……………。(氣の無い間ひ)

男 乙。(あらぬ方を見ながら) 下まで歩かう。

男 甲。うむ。

老主人(注意深く二人を見乍ら黙る。家の横から老家婦出て來る。家外から雨戸を、ここんくさせてから縁側の男たちを見つける。)

老家婦。おや、お上んなさいなあ。其處では蚊が食つて仕様が無いから。何んと言ふ死太い蚊なんだらう。(蚊を拂ふ)

男。はあ。これは……………(二人および腰になり頭を下げる。)

老家婦。お豊さあ。濟まんなあ、いかう待つたか。

老主人。婆あさ。好い加減に人を待たせろい。お豊さあ。先刻から待ち草臥れて居るんげのう。

老家婦。さうかく、氣の毒だつたなあ。……………あの、お前さん方、これから下んなさるのかねえ。もう

遅いが。

男 甲。はあ何に、月が出て居りますから。

老家婦。なんなら宿つて行きなさいなあ。今宿も空いて居るんだし、……………なあ、お父つあん

老主人。あゝ、山の天氣なんざあ當になんねえ。

老家婦。此處を下りれば、もう宿は無いし、下の村だつて皆んな寝て了つて居るだらう。

まの悪い沈黙。

老家婦。お前さん方、鑛山にでも居なすつたなかねえ。

男 甲。はい、去年の秋裏の方から鑛山へ入りました。

老家婦。さうかねえ。鑛山も評判が悪いんでなあ。一体、貴方だち鑛山へ入つて働くと云ふ身体ぢやないんだ。

男 乙。一年間で全然身体を害めて失つたんです。此様でも無かつたんですが。

老主人。鑛山の仕事は荒いと言ふからなあ。こつびごく、やられちや如何んな者だつて續きやしない。

問。二人腰をうかせる。二言三言はゞかる様に話してから思ひ切つたやうに立ち上る。

男。いや、お蔭さまで。

老主人。ぢや、立ちなざるか。

老家婦。本當に宿つて行きなると好いんだが。

男 甲。いや飛んだ御厄介をかけました。

二人立ち上つて禮を述べる。

老主人。好いかなあ。ぢや、氣をつけてなあ。

老家婦。ぢやあ、なあ。氣をつけて。幸ひ月夜だけども。

男 甲。有難う。

乙黙つて涙ぐんで居る。やがて二人下手に去る。老主人立ち上つて椽の所に來る

老主人。遂々、行つて失つたなあ。

老家婦。今頃から出て行つて如何する算りなんだらう。

老主人。如何するつて。何も出來なくなつたら村の駐在所へでも泣き込むだらうよ。

お豊立ち上る。ほんのり白い顔。さぐる様にして年寄の傍へ來て坐る。髪のはつれを、かき上げる。

お豊。伯母さん。

老家婦。何にかへ？

お豊。色々の人があるのねえ。

老家婦。如何して？

お豊。だつて今時分あんな淋しい嶮しい夜路を、とぼく下つて行く人があるんだもの。しかも病人なんでせう。

老家婦。そんな事言つたら際限ないさ。

お豊。でも氣の毒だわ。あの人だつて宿つて行き度いんだらうが、金銭が無いから行つて失つたんだわ。湯にも入らないでねえ。

老主人。可愛相さなあ。あんな遊び盛りの男が何も言ひ出す事も出來ず只おづくして居るのだから茶代も置かすに行つたんだから、よくく困難つて居たんだらう。

老家婦。色々の人間があると言へばなあ。すつと古い事だけでも牢破りが逃げて來て五萬斗原の藪ん中で死んで居た事があつた。皆んなで見に行つたものだが、二日間も菰を被せた儘、ほつたらかしてあつた。今でも思ひ出すがなあ。

老主人。何時の事を言つてるんだ。婆あさ。廣い世の中だもの。そんな人間はざらにあるさ。此の同じ月の下でだ。針の様な娑婆を血みごろになつて驅けすつて居る破牢者もあらうし、餓しがつて、ぶつ倒れて居る人間も何處かにあるに違ひねえ。それから見たら、三度々々白い飯をいたゞいて居たら不足

が無いと言ふもんだ。婆あさ見たいに忙がしい〜つて口説いて許り居ては罰があたるぞ。

老家婦。ほゝ。ほんになあ。(お豊も笑ふ)

老主人。お豊はお豊さで、おつ母さは死んだつて彼様な氣だての好い兄さがあるしなあ。

老家婦。また。彼様な氣だての好い兄さも少ないからなあ。お豊さも仕合せだよ。

お豊。えゝ。(お豊活々した顔。莞爾する)

老主人。神奈山の天頂が、ざら〜光つて居る。これで明日も天氣なんかなあ。

老家婦。天氣にしたいいもんだがねえ。

老主人。あゝ。俺らはもう寝るよ。何んにも爲ない様でも疲れるものだなあ。(欠をしてから奥へ入る。)

老家婦。(煙草をすげ〜吸つた後)。お豊さ。濟まんかつたなあ。さあ、平常の通りやつて貰はうか。

お豊。えゝ(お豊、老家婦の後に廻る、肩からもみ初める。暫時、無言。)

お豊。奥は静かねえ。皆んな寝たんだらうか。

老家婦。なに。未だ寝る時間でもないが。

(お豊奥を窺ひ乍ら笑ひに紛らし何氣ない様に。)

お豊。鈴木さんは今晚は、謠らないのねえ。

老家婦。あゝ。もう謠曲も飽きたんだらうよ。うちの爺いさんに習つて退屈紛れに毎晩のやうにやつたもの

のだがねえ。

お豊。だげ。……面白方だわ。

老家婦。冗談ばかり言つてなあ。(苦笑。)

お豊。だつて。あの人の嫌に聞えないもの。……まあねえ。(言ひ遊んで)伯母さん。

老家婦。何に？

お豊。昨日つたら(笑ひに紛らし乍ら)『俺にも肩をもんで呉れ。』だつて。

老家婦。もんであげれば好かつたのに。

お豊。『まあ! 伯母さん。(笑ひ乍ら)顔を赤らめ、袖をふる。瞬間羞恥と陶醉のお豊。』

老家婦、お豊の横顔を見る。

老家婦。お豊だ。

お豊。えゝ。

老家婦。今年、一かねえ?

お豊。年? いゝえ。丁度甘なの。

老家婦。死んだおつ母あさは、お前を可愛がつたものさあなあ。

お豊。えゝ。

老家婦。お峯さ、はお前と言ふと氣狂の如になつて頬すつたり、背負つたり、抱いたり、泣いたり、笑つたりしたものだ。村の人からは兎や角言はれた人だけれどもなあ。お前には何時も立派な着物を着せて、『お豊を琴のお師匠にするんだの、何んにするんだのつて。』頭刳死んで失つたがねえ。死ぬ時私等の前に手を合せて。『お豊がお豊が感然でなりませぬ。』つて泣き〜息を引きとつた。それからもう十何年にもなるからなあ。

お豊。……

老家婦。何にせえ。兄さは、しつかり者だから好いけんぞ。それにお前も氣立てが優しいからなあ。……

お豊。ええ。(顔を見上げ乍ら)

老家婦。お前、琴が好きかへ?

お豊。好きだわ。

老家婦。どうだえ。兄さが『うん』と言つたら琴をやつては。

お豊。だつて。私には、なれるだらうかしら?。(あらぬ方を見る)

奥から春子出て来る。化粧をして居る。杓ミタホルを持ち、何か、可笑しくてたまらぬ体、入り口の所で一寸帳場をのぞいた後、たまらぬ様に笑ひこけ乍ら入つて来る。

老家婦。まあ。如何したの? お春さん。

春子。ほほ、。(一人で笑ひこける)

老家婦。まあ。よく其様に笑へるものねえ。

春子。だつて。お可笑いわよ。(一寸口を突らせて)あの鈴木さんがねえ。ほ、。

老家婦。まあ。此の人つたら。如何かして居るねえ。(笑ふ)

春子。だつてお可笑いんだもの。あのねえ。——あのねえ。おつ母さんが鈴木さんのお室でねえ。

老家婦。あ、。

春子。鈴木さんのおつ母さんとお茶を飲んで居たでせう。

老家婦。好くまあ。あんなに二人共話が合ふもんだことねえ。

春子。鈴木さんが私にも来い、つて言ふんだけれども、私、一人で部屋で編物をして居たの。

老家婦。おや! 如何して?

春子。態どちらしてやつたの。三邊も四邊も迎ひに来たけれ共、もう少し、つて延ばして置いて、そ

れから、タオルと杓をとつて鈴木さんの室の前の廊下を隠然通りぬけて逃げて来て失つたの。

老家婦。まあ。人が悪いのねえ。憤るよ。そんな事をしてさ。ほ、。

春子。だつて! あの人は憤りやしないわ。かへつて、みそをかくわ。

老家婦。まあ。あんな事を言つて居る。

春子。おや、もう遅いのねえ。お豊さんも大層だわねえ。ほ、。

お豊。え、。(微笑む、老家婦黙つて居る。)

春子。ちや、一風呂入つて来るわ。私が湯に行つたつて言つちや嫌よ。

春子下駄をはき闕の所で、ひよつと空を仰ぎ

春子。好い月なんだわ(見られる体、やがて下駄の音をひやかせ乍ら小走りに去る。)

一寸間。ひよつとした、はずみに。老家婦一つ小さい欠。

老家婦。おや! (と言つてお豊の白い腕をさらへる。細い指輪。)

お豊。ほ、。頭に見つかつたわねえ。

老家婦。之かへ？ 兄さが東京へ行つた時買つて来て呉れたつて言ふのは。

お豊。え。今日初めてはめて見たの。

老家婦。一寸！(お豊ぬいて渡す。)

老家婦。今まで氣が付かなかつたよ。

お豊。伯母さんの見えないやうにして居たもの。

老家婦。如何して？

お豊。だつて。私には此んな物不要ないんだもの。(聲を落す。)

老家婦。そんな事はないよ。兄さも實際感心だなあ。好く氣が付く(それを、さつて自分の指にはめて見たり、灯に

かざして見たりする。)

その時鈴本と言ふ男奥より出て来る春子の其處に居ないのを見て意外相な面色、上り口に行つて下駄を見る。老家婦可笑し相にくすくす笑ふ。鈴本一寸てれた如に、そこへ寝ころぶが亦立ち上り棚の邊から古雑誌を見つけて来て亦伏す。

老家婦。退屈でせう。鈴本さん。

鈴本。うむ。退屈だ。

老家婦。何邊風呂へ入つたの？

鈴本。何邊も入りやしない。

老家婦。また、よく眠つてばかり居るんだもの。

鈴本。湯に入れば睡くなるぞ。ぐうぐう、もう豚兒見たいなもんだ。(一寸顔をあげて鼻をつるりさなでる。)

老家婦笑ふ。お豊も笑ふ。

鈴本。一寸。小母さん、それは何んだえ

老家婦。これ？ お豊さの指輪。

鈴本。ほお。指輪？ どれ。

お豊。まあ。伯母さん。

老家婦。まあ。一寸見せて上げなあ。

お豊。だつて。

老家婦。好いからさ。

鈴本。ほう。素敵だ。本物だものなあ。

老家婦。兄さが東京の土産だつて。

鈴本。あの兄貴が？ 感心だなあ。

老家婦。お豊さあ、手が美しいさかへ好く、うつるよ。

鈴本。實際。奇麗な手だ。白くて、ふつくり圓くて。女の手の美しいのは得益だよ。

老家婦。そんなに手を引込めなくとも好いよ。ほ、顔をまつ赤にして。お豊さ、本當に生なんだもの

ね。……あ、有難う。お蔭で樂になつた。

老家婦。(立ち上り) お豊さ(お豊と鈴本をかへり見てにこしくし乍ら。冗談らしく) 琴のお師匠になつたら鈴本さんに

も、みつしり仕込んで上げなあ。

お豊。まあ。伯母さん。あんな事を言つて。

鈴本。ほう。お豊さん。今度琴をやるのかねえ。そりや初耳だ。

お豊。(顔を赤らめ乍らも半ば肯定するやうに。)だつて未だ、そんな事わからないんだもの。伯母さん何んでも言ふのねえ。

鈴木。小母さんが叱かられたつて譯だなあ。は、は。

老家婦。ほ、ほ。(皆笑ふ。明るい空氣。)……………お豊さ一寸待つてお呉れなあ。(老家婦奥へ去る。)

鈴木とお豊だけになる。間 お豊の顔を凝視し見ながら。

鈴木。そうすると、お豊さんも琴のお師匠か。

お豊。私なんか出来るか如何かわからんのですけれど。

鈴木。そんな譯ないさ。トツテコロリンシャン。六段か。琴も好いねえ。

お豊。え、え。

鈴木。お豊さんなんか器量も好いし、その素敵な手で弾いて見な。もてる事受け合ひだ。

お豊。まあ。(笑つて。)そんな事ないわ。

鈴木。いや實際だよ。小母さんや、くだらない客の肩を、もんで居るより如何程好いか知れない。

一寸間

お豊。もう遅いでせうねえ。

鈴木。うむ。九時だ。

お豊。もう歸らなくてはならない。伯母さんは何して居るんだらう？(手で、邊りをさぐる。)

鈴木。何んだえ？

お豊。あの！

鈴木。指輪かえ？

お豊。はい。

鈴木。此處にあるよ。

お豊。あの濟みませんが。

鈴木。一寸。指を出しなあ。俺がしてやるから。

お豊。まあ。(瞬間。顔を赤らめる。何氣ない様な笑ひ。)

鈴木。好いだらう？ 素敵なお手を拜見と。

お豊。まあ。冗談ばかり。(羞恥を見せる)

鈴木。冗談ぢやないよ。手をお出し。一寸。

お豊。まあ。だつて。

鈴木。だつて如何したの？

お豊。不可ないわ。

鈴木。不可なけりや返さない許りだ

お豊。困るわ。(一寸甘ゆる如き姿態)

鈴木。困らないよ。誰も居ないもの、

次第に。何氣ない風を見せつゝも惱ましさを覺えて来るお豊 冗談の中に人知れぬ眞剣味。

お豊。ぢや！

鈴木。うむ。

お豊。本當に返して呉れる？

鈴木。心配しないで好いよ。

お豊。ぢや。吃度ねえ。(媚びるやうな調、深い意味。)

鈴木。あゝ。

お豊羞ひ氣に腕をのびす。緊張した空氣。春子。下駄を響かせ乍ら小走りに来る音。上氣した顔が美しい。——鈴木立ち上る。

鈴木。おい。そこへ置いたぞ。(ほんま指輪をお豊の傍へ投げる。指輪ころがって隅へ。)

お豊。はつきして出した手の動きのきれぬ体。瞬間氣の狂つた如な笑。やがて悲し相にうなだれる。

鈴木。春さん。人が悪いなあ。

春子。ほゝゝ。堪忍ねえ。あの私。何んの氣も無しに出て失つたの。ほゝゝ。

鈴木。何んだか、わからないせ。

春子。今、丁度。向ひの×屋のお客がねえ。可愛い赤ちやんを連れて湯に入つて居たの。一寸だかせて

貫つて頬すりしてやると目をつぶつて、じつとして居るんだもの。

鈴木。春さん。

春子。えゝ。

鈴木。赤ちやん好き？

春子。えゝ。(はつき鈴木と視線があつて)——だつて赤ちやんは可愛いもの。

鈴木。好い月だねえ。

春子。好い月だわ。

鈴木。明日あの山に登らない？そして燕の方へ出て見ない？おつ母あさんも行くつて言つて居たよ。

春子。えゝ。登つて見ても好いわ。今頃山苺や山葡萄もあるでせう？

鈴木。あゝ。あるだらう。……さうなれば亦春さん。辨當を願ふよ。

春子。えゝ。何んでも作つて行くわ。燕は硫黄泉ですねえ。

鈴木。あゝ。湯は眞青に澄透つて居て素敵に奇麗だよ。本當に明日天氣にしたいねえ。

春子。えゝ。大丈夫でせう。

鈴木。おつ母さんは寝たらうか？

春子。何時？おやもう遅いのねえ。私何んだか、喉がかわいたの。

鈴木。ぢやあ。彼方へ行かう。

二人奥へ去る。お豊一人残る。息苦しい沈黙。やがて、たまらなくなつた如にしくく、戯り泣く、間、老家婦急いで奥より出て来る。お豊の泣いて居るのを見て立ち止る。

老家婦。如何したの？。(お豊の顔をうかがふ)

お豊。……

老家婦。おや。こんな所に指輪が。(いぶかし相に拾ふ。)

お豊。……

老家婦。如何かしたかへ？(奥の方をうかがひ乍ら憂し氣に尋ねる。)

お豊。顔をあげる。髪かんのほつれを、かき上る。蒼礎めた微笑。

お豊。あの（口淫む。）私淋しくなったの。

老家婦。（淋しき笑。慰める如に只。）さうかへ。

手をお豊の肩にのせる。間。

老家婦。ちや。濟まないが明日の晩も来ておくれな。（小ひさい包を渡して。）あの。少し許りだけんど兄さに

持つて行つてあげてお呉れ。

お豊。有難う。ちや伯母さん失禮します。

老家婦。あゝ。ちやあ、氣をつけてなわ。

お豊下駄をはく。杖をさる。二三歩外に出る、月光がまつき顔を斜めに照らす。あるか無きかの風が髪毛をふるはせる老家婦の方に廻つて雨戸を閉め始める。

老家婦。好い月だ。旅の男はもう何處まで行つたらう？

お豊。えゝ（一寸山下をかへりみる。忽ち立ち止まる。物悲し相にうつむく。）

老家婦。如何したへ？

お豊。えゝ（突かれたやうに二三歩あるき出す、お豊。無意識に手が帯にはさんだ笛にかゝる。）

— 幕 —

一二・六・七

大陸の學術調査を行はんことを少壯 學者に望む

早田 文藏

國家の發展と共に、科學的調査が必要になつてくることは、言ふまでもない、それ故に世界の強國は、絶えずその驥足を伸ばさうと思つて、未開地の探検を行うてをるのである、例へば英國學者の印度に於ける、獨逸學者の支那に於ける學術的事業は、大に見るべきものである、そこで、我が日本の學者も、後馳せながら、大陸に向て研究を擴張せねばならない氣運となつてきたのである。

以前は、日本の科學的調査は、甚だ幼稚なものであつて、日本國內又は殖民地の調査でさへも、甚だ不充分なものであつて、到底海外殊に大陸にその歩を伸はす所へは、仲々いかなかつたのであつたが、近頃は、日本の科學も、長足の進歩をなして、國內及び殖民地の調査も、追々完全に向つてきたのは、甚だ悦ぶべきことである、さて此處まで達して見ると、日本の學者も、少しは海外に足を伸ばしてもよい様に見える。

元來日本は、島國であつて、國の富源にも、研究材料にも、限りがある、僅少の材料で遣て行つては、如何に撞つて見たところで、燒直しをする様のものである、さてこうなると、どうしても海外に飛出して、大陸で一つ仕事をやつて見たいと思はざるを得ない、此の考が私をして、印度支那に赴かした

一つの源因である、私は植物専門のものであるから、以下は専ら植物調査に就いて御話しをするのである。

元來私は、臺灣植物を専門に研究して、居たものであつたが、臺灣島の植物調査が進むに随つて、研究材料は追々少くなつてくるのを見て、私は自身の仕事を段々切り上げねばならないと思ふたのであつた、之れは自分の仕事の成功を意味するものであるから、自分として大に喜ばしいことであつたが、然しながら、熟く思ふに、自分は臺灣と云ふ島があつたから、此處に仕事することが出来て、誠に幸福であつたが、私の後から来る人は、何處に仕事をするであらうか、何處が好い仕事場を、後の人のために、見附ておくことは、我々先輩の義務ではあるまいかと考ふる様になつた。

抑も私が臺灣植物を研究し初めたのは、私の先輩の一人川上博士が、私を臺灣に呼んで呉れたためであつたけれども、最も大切なる源因は、恩師松村先生の奨励であつたのである、私が大學本科を卒業して、大学院へ入學したときに、指導教授なる松村博士は、私に臺灣植物全般を研究させるために、當時大學に集つておつた總ての材料を私に與へられたのである、その材料は先輩牧野、大渡、三宅其他の諸氏の辛苦して集められた貴重なる材料であつた、之れが私の仕事の最初の資本であつた、爾來貳拾年の間、私は臺灣植物の研究に従事し、茲に一段落を告げる様になつて見ると、前記先輩諸氏の材料を採集しておかれたこと、並に恩師の總て之を私に賜はつたことの、難有いことであつたと云ふことが、染々身に感じたのであつた、思ふて茲に到つて次に起きた考は、恩師並に先輩に對して、如何にして此の恩を報えんかと云ふことであつた、かくて私は、熟考の結果、報恩の方法は唯一つしかないことを考へた、それは後進のために、仕事場を見附け、且つ後進のために、研究材料を提供するのであると考へ

た、そこで不惜身命の勇猛心を起して、大陸の未開地の探検を計畫したのである、時は大正八年十二月であつた、爾後探検に必要な乗馬並に射撃の練習に従事し、準備おさおさ怠りなかつたのである、大正九年十月、臺灣植物圖譜第拾卷を刊行して、之れで私は、臺灣植物調査に一段落を告げることが出来て、積年の志を遂げたに依つて、更に大勇猛心を起して、印度、支那に赴かんと決心したのである、當時私が臺灣總督府へ提出したる計畫書は、左の如きものであつた。

佛領印度支那植物調査計畫書

佛領印度支那は、熱帯圏内に在りて、東は支那共和國に隣り、西はシヤム、ビルマを隔て、英領印度に接す。抑も泰西の學者、絶東植物の探險に着眼せしや久し、故に英領印度並に支那大陸に於ける英國植物學者の研究は、業に大に觀る可きものありと雖ども、佛領印度支那に在りては、其兩者の間に介在し、豊富なる植物帶を有するに拘らず、其の探險の未だ遍からざるは、實に學界の一大恨事を謂はざるを得ず。

小職曩に臺灣總督府の命によりて、佛領東京^{トシキ}に航し、親しく其地の植物の研究に従事し、當時携へ歸りたる材料に就きて、頃日其一部の研究を發表するを得たり、即ち一は印度支那總督府の刊行物たる Bulletin Economique 紙上に於て發表せる Sur le Xun-Peh-Muh, nouvelle espèce de Podocarpus du Tonkin, de concert avec qudques notes sur le Peh-Muh. と題する論文にして、一は米國の植物専門雜誌なる、ボタニカル・ガゼット誌上に於て發表せる Protomarattia, A News Genus of Marattiaceae and Archangiopsis. と題する論文なり、前者は稀有なる二種の植物を研究せるものにして、後者は前世界の遺物とも見るべき、植物分科に屬する、一新屬の發見にかゝり、兩者俱に學術上、重要なる貢獻なりと世に稱

せらる、如上小職が佛領東京産の植物につきて研究せる事實は、印度支那が如何に豊富なる植物帯を有するかを證明すると共に、又同地方が如何に學術上未開の地たるかを語るに足るべし。

印度支那の開發せられざるや、常に學術上の事のみならず農工業の見地よりするも、其開拓すべき餘地頗る多し。

由來印度支那は、豊富なる植物帯を有する地域にして廣袤實に二十五萬九千九百二十平方マイルに及びべり。之を我が帝國及び其領土を加へたる面積に比すれば、稍大なりと言ふべきなり。故に印度支那に關する學術上の研究は、單に學界に貢獻すること多大なるのみならず、農工業の發展に資することも、亦偉大なるべきを信す。

印度支那探險の必要前述の如くなれば、之れが研究の方法を概説せんと欲するなり。依て其調査方法は自ら此の二期に劃するものなり。

第一期 材料の採集並に一般の植物調査

調査の第一歩は材料の蒐集にあり、一年間即ち四季を通じて、該地方の全植物を採集し、且つ各地方に於ける各植物帯を調査し、然る後、其材料の一般研究と、植物帯の實地觀察とを綜合纏綴し、以て調査に一段落を告ぐるものにして、換言すれば印度支那植物帯誌の著述の完成を期する所以にして、之れを第一期計劃とす。之れ一は以て學界に貢獻し一は以て農工業發展の資に供せんがためなり。

第二期 採集材料の詳細なる研究

小職が最も努力せんと欲するものは、如上第一期の調査にして、即ち本年四月印度支那に航し、一個年を通じて其材料の採集と、實地踏査とを行ひ、然る後採集材料の一般研究に入らんと欲するものなり。

り。然るに此一般研究を遂げんには、一面、日本及び臺灣植物に關する智識を要すると共に、他面には印度支那植物に關する智識を要するや論を俟たず。而して小職は多年、本邦及び臺灣植物研究に従事し、得る所既に多しと雖も、印度支那植物に關する智識は、甚だ乏しきものと謂はざるを得ず故に小職の立場より言へば、印度支那地方に於て、採集せし材料を携へて、佛國、巴里博物館に到り、同館に於て豊富なる印度支那植物を參考として、小職が智識の缺けたるを補ひ、前記採集材料の一般的調査を行ふを得策なりと信す、故に小職は印度支那の實地踏査を終りたる後、直に佛國巴里博物館に赴きて、約六個月の間滞在し、其採集材料五般研究とを兼ねて第一期計劃の目的たる印度支那植物帯誌の著述に従事せんと欲するものなり。

第二期計劃即ち採集材料の詳細研究

第二期の研究は、植物各個に關する研究なれば、到底短時間には、其調査の結了を見るべくもあらず。前述の如く印度支那は、其面積廣大にして、且つ熱帶圈内にあるが故に、植物帯の豊富なる、到底日本臺灣の比にあらず。従つて其種類、亦萬を以て算すべし。故に其材料の詳細なる調査は小職一人の力に能くするところにあらざるなり。こは切に後進學者の努力に俟たざるを得ず。幸にして小職は現に東京帝國大學助教の職を瀆せるを以て、年々入門し來る學生及び卒業の學士を指導して、此の廣大無限なる學術上の寶庫を開發せんと欲し、且つ之れが成功を信するものなり。

小職曩に臺灣總督府の依頼によりて、臺灣植物の調査に従事することを得たり。今や幸に該島の調査事業は完成に近からんとす。此際更に一步を進めて、臺灣總督府保護の下に、大陸植物調査の端緒を啓かんが爲に、前記第一期の計劃を遂行せんこと、小職が終世の志望なり、而して第二期計劃は、東京帝

國大學の保護の下に、後進の學士と共に、之れに従事せんと欲す。幸に諒察せられんことを乞ふ。

東京帝國大學助教理學博士 早田文藏

此の計畫の初期には、私の友人諸君は、「早田があんなことを云つても、果して印度支那へ行けるか何うか。」と云はれたけれども、自分の耳の邊には、常に嘯く聲があつた。「身命を愛せずして、但だ無上道を惜むものは、天の助けを受くるものである、汝は必ず印度支那に行くことが出来る、奮進せよ。疑ふこと勿れ。」私は此の言葉を信じて疑ふことはなく、邁進した、到頭私は臺灣總督府より五千圓の金と、大學より一ヶ年の暇とを貰ふて、印度支那に行くことが出来ることに決定した、

今となつて當時を回想すれば、實に快心に堪へざるものである、當時私から見れば、天下の同情翕然として此一身に集まつた様な感があつた、旅費の増加も許可せられ、研究費も貰ふことが出来た、加之ならず、私は拾五年も前から、豫め此事あるを知つたものか、乃至は虫が知らせたものか、家を成すや否や、身後の計をなすに怠らないものであつた、故に當時の私は、既に相當の貯蓄を持つて居つた、そこで全部の貯蓄を公債に變更して、身後の計を固定し、大正十年櫻散る四月の半ば、東京を出發した、『恐くは白骨となつて還るであらう』とは、當時の考へであつた。

同年五月七日、交距支那の西貢市に到着し、それから内地へ侵入したのである、さて實際に當つて見ると、豫想とは違つて、仕事は困難で且つ抄取らない、こんなことでは、豫定の一ヶ年間の出張期では、とても駄目と考へて、安南旅行の後、愈々臍を極めて、二ヶ年掛かろうと決心した、其當時大學並に總督府へ提出したる出張期間延長に關する申請書は、下の如きものであつた。

佛領印度支那出張期間延長に關する申請書 (附安南地方調査の概項)

小職曩に提出せし佛領印度支那植物調査計畫書に於て、一ヶ年を以て該地方の實地踏査並に材料採集を完了せんと云へり、こは日本乃至臺灣に於て爲し得る仕事の歩調を標準としたる計算に基きしものなり、

然るに當地に來り、實際の調査を爲すに及んで、印度支那に於ては、曩に標準として取りたる仕事の歩調と同一歩調を以て進行することの不可能なるを知れり、之れ日本乃至臺灣に於ては、多くは食事燈火寢具を有する宿舍あるに反し印度支那に於ては何等如上の設備なき茅屋あるのみ、實に印度支那は、一步都會地を離れば、眞の野蕃地にして、加ふるに氣候險惡土地險阻言語不通、時に蕃人の獯猛なるあり、殊に濕潤の候にありては、採集材料の乾燥に多大の時日を要する等、其の仕事の困難なる、到底日本及び臺灣の比に非ず、小職去る四月十五日京地を發し、五月六日西貢に着し、直に安南地方の調査に着手し、約一ヶ月半の日子を費し、安南高原六十里を跋涉し、以て全般の調査を遂げ、多大の材料(種類單位として約八百種)を齎し再び西貢に歸來せり、今にして回顧すれば、如何にして此の困難を切り抜けんか、乃至は如何にして此の材料を處理せんかと焦慮せしこと屢々なりき、乍去兎も角も如上の採集材料を一人にて處理し、茲に再び西貢に歸るを得たるは、事實天祐たりと云はざるを得ず、小職目下當地の科學研究所 (Institut Scientifique) にありて、採集材料の整理と、文献の涉獵とに執掌し、兼て更らに着手すべき旅行の準備に従事しつゝあり、此の間熟々思ふに、曩に計畫したる一ヶ年の期間は、全く仕事の歩調を誤算したるものにして、今實地經驗より得たるものを以て計算すれば、少くとも二ヶ年を要す、之れ小職が出張期間を更らに一ヶ年、即ち二ヶ年(但し旅費棄權)に延長せられん事を申請する以所なり、以下安南地方調査旅行の概項を列記して、同地方に於て小職が爲せし仕事の狀況の幾分を

示さんと欲す、幸に諒察せられん事を希ふ、

東京帝國大學助教理學博士 早田 文藏

佛領印度支那安南地方調査旅行の概項

大正十年五月六日我等が四川丸は正に佛領印度支那安南海岸に沿ふて航行しつゝあり、甲板上より之れを遠望すれば、蜿蜒たる山脈は南北に連り、人をして此の高峯の奥には、如何なる天地の存在するかを連想せしむ。

由來安南の地たる、印度支那の東側に位し、數個の山脈南北に縦走し、其の間幾多の高原ありて、豊饒なる盆地を圍繞し、氣候亦快爽にして、自ら特殊の天地を構成すと云ふ、小職五月七日西貢に着し、數日滞在の後直ちに安南に向へり、之れ同地方固有の植物帶を調査せんが爲なり、五月十一日西貢を發し、即日安南の小市 Nhatrang に着し、Institut Pasteur の Schein を訪問し、安南高原旅行の計畫を定めたり、抑も安南の平地は、全く特殊の氣候を有し、從て其の植物帶は固有種に富む、而してその高原も亦自ら特殊の景觀を呈す、今便宜上高きより低きに向て説明すべし、安南山脈南方の盟主をロンピアン山(海拔六・九三〇尺)となす、其の山腹より安南高原を俯瞰すれば山丘起伏するの狀澎湃たる大洋にも譬ふべし、その高原の東方の山腹には、廣大なる森林ありて自ら固有の植物帶を形成す、高原亦河流の貫通するありて、沃饒たる盆地極めて多し、然れども人口極めて稀薄にして、人の之れを耕するものなし、山腹の亞熱帶林も、亦廣大にして、巨木大幹枝を交へ、壯觀云ふべからず、平地林の光景亦壯大にして、海の如く開展す、土地平面にして腐蝕土充滿せり、一と度開拓に着手せんか、一として適せざるものなかるべし、然れども人の之れを耕するなく空しく荒廢に歸せしむのみ、稀に蕃人の之れを試

むるものあるも、多くは昔年ならずして之れを放棄し、或は火を失して鬱葱たる森林をして空しく不毛の地とならしめたる所もあり、如上小職の見所によれば佛領印度支那は、植物學上の處女林たるのみならず、農工業の見地よりするも亦處女林たるを疑はず、最後に附加せし寫眞貳葉は小職が旅行當時の光景を示すものなり、讀者之れによりて印度支那旅行の困難なるを推察し賜らば、小職の幸之れに過ぎず、

西貢市コンチネンタルホテルの一隅にて 早田 文藏記す

以上の申請書を郵送した後、私はカンボージに赴き、洪水林の研究に従事した、此間熟考するに、印度支那に來たならば、何んとかして、同地方の神祕國の如く考くられておるところの、ラオスの最北限まで行かなければ、旅行家としても、且つ採集家としても、肩身が狭い様に思はれ、且つその地方には、必ず面白い材料が澤山あるであらう、そこで再び西貢へ還て、ラオス侵入の大旅行を計劃した、同年九月海路暹羅に航し、鐵路センマイに赴き、是より國境を起いて、佛領ラオスの北限へ達せんと計劃したが、時恰も雨期に際し、度々洪水に遇ひ、非常なる辛苦を嘗て、拾月下旬漸くラオスに達した。その後拾壹月・拾貳月の間、ラオス地方に採集を試み、拾貳月下旬、サバナケツトに達したときに、切めて日本から來た數通の手紙を受取つた、此内に松村先生の懇篤なる御手紙があつた、それは是非歸つて來いとの仰せであつた、そこで私は前記の出張延期の計劃を變じて、早々歸朝の準備をなし、大正拾壹年參月、佛國便船で直航して、東京に還つたのである、之れで私の第二回の大探險の事は終つた。

此の探險は豫想通りに行かなかつたけれども、相當成績を擧ぐる事が出來た、即ち此の旅行によりて、佛領印度支那は勿論、暹羅にまで渡つて、採集をしたから、齎し歸つた材料は實に莫大なるものである、

之れを第一回の旅行によりて得たる佛領東京シマの材料と合せたならば、印度支那全体に亙りたる材料と稱することが出来る、そこで私は、今度第三回の探險を思ひ立ちて、同時に臺灣植物調査の補遺をも行ひ、且つ佛領印度支那植物調査を繼續事業とせんことを計劃した、そこで大正拾壹年八月臺灣總督府に以上の計劃に關する申請書を提出した、それは下の如きものである。

臺灣植物調査補遺並に熱帶殊に佛領印度支那植物調査に關する申請書

小職曩に臺灣總督府の委託に由り、臺灣植物調査に従事すること前後二十有余年、此間該事業に關與したる諸氏の助力を得て、臺灣植物圖譜の著述に掌輒し、以て専ら事業の進行に努力したり、爾來着々調査の歩を進め、今や將に完成に近づかんとし、圖譜も亦第拾卷を重ねたるを以て、該事業は一段落を附することなしたり、然れども曩に調査を経たりし或部分の如きは、恰も創始の際なりしを以て、稍粗大に傾き、且今にして之れを觀れば、多少改訂を要すべきもあり、加ふるに後日追々發見せられし材料も、亦尠からざるを以て、前調査の補遺を促すことも亦極めて切なるものなり、是れ小職が茲に再び該調査事業の繼續を申請する所以なり、惟ふに臺灣植物系は對岸大陸の植物系と極めて密接の關係を有す、今や臺灣植物調査の業略は成らんとするに際し、百尺竿頭更に一步を進めて、大陸植物の調査を行はんは、我が帝國の發展上最も緊要なる事業の一たり、臺灣總督府は茲に見るところあり、即ち大正六年小職に命するに、佛領東京シマに航し、親しく該地方の植物を調査すべきを以てせり、小職命を奉して初めて彼の地に赴き、當時携へ歸りたる材料を研究し、頃日已に其一部を發表せり、越へて四年即ち大正拾年小職再び命を奉じて印度支那に航し、南安南の高原より交距カンボウシを経て、西方暹羅に到り、更にその北國境を越へて、再び佛領ラオスに入り、多大の材料を蒐集して、本年三月歸朝せり、是れ小

職が曩に提出せる佛領印度支那植物調査書に於て述べたるが如く、該事業の第一期計劃の一部を遂行したるものなり、小職曩に佛領印度支那再出張に關する申請書に提出し、更に明年を期して三たび彼地に航し、前記第壹期計劃の殘部を遂行し、以て第二期計劃の實行に入らんと欲するものなり、抑も第貳期の事業の計劃たるや、曩に提出したる意見書に於て詳論せるが如く、植物各個に關する研究なれば、到底短日月を以て其の調査を完了すべきにあらず、蓋し佛領印度支那は、其の面積廣大にして、實に我が臺灣の十九倍余に達し、且つ其他熱帶圈内に在るが故に、植物の豊富なること我が臺灣の比にあらず、從て其の種類も亦萬を以て算すべし、故に其の材料の詳細なる調査は、小職一人の力の能くするところにあらざるなり、須らく後進學者の手に俟たざるべからず、幸にして小職は現に東京帝國大學教授の職を汚せるを以て、年々入門し來る學生及び卒業の學士を指導して、此の廣大無限なる學術上の寶庫開發せんとせば、其の成功は期して待つべきなり、

小職現職を汚してより以來、熱帶植物研究に志す學生學士頗る多く、今や前記の第二期計劃を實行すべき機運は將に熟するを見るに至れり。前述の如く、臺灣植物の調査は既に完成に近しと雖も、尙ほ其の改訂補遺を要するもの頗る多く、且又印度支那植物調査の必要も亦迫れり、茲に於て乎小職は、臺灣植物調査補遺並に熱帶殊に佛領印度支那植物調査なる項目の下に、前記の二者を合併し、向ふ拾年計劃の繼續事業として、遂行せんと欲するものなり、仍て該計劃に對する經費豫算書を添附し、茲に是を具申す、幸に諒察せられんことを希ふ、

大正十一年八月

東京帝國大學教授理學博士 早田文藏

幸に此の計劃も、第三回探險に關する件丈は容れられて、經費支給を受けるを得ることに決定した

が、こゝまで来て非常に遺憾なことには、私の健康は歸朝當時から次第次第に衰へて、今や到底探険旅行に耐へる身体ではない、且つ先般來私自らを計らず、松村先生隱退の後を襲いで、誤て現職を汚しておるところから、學生の指導のために、一寸の暇を持たない、で到底前記第三回の探険に出掛けることが出来なくなつた、之れは私が終生の恨事と考ふるところである、そこで私が、切に願ふところは、小壯學者の輩出して、私共の仕事を繼續して、大陸の植物調査を行はれんことである、一と通りの材料は、前述の通り備つてをるのであるから、若しも少壯有爲の學生が、大勇猛心を起して、必ず遂行しやうと決心するものなるば、一と通りの調査研究は出来るのである。勿論是れは極めて初期のものである、けれども、その有様は、丁度私が貳拾年前に、松村先生より臺灣植物の材料を頂いた時と同一である、元より此の初期の仕事は、あらごなしであつて、鉦細工である、決して小刀細工ではない、けれどもこの鉦細工あればこそ、小刀細工も出来るのである、あらごなしをして之れを學界に提供すればこそ、多くの學者輩は之れを部分的に分ちて、精細なる研究を行ふことが出来るのである、之のあらごなしは、學術の進歩のためには、最も必要なことで學界は此の如き人の功績を認め、且つ感謝すべきものである。今私が最も見出さんと願ふものは、此のあらごなしをせんとせるところの、而して大勇猛心を有するところの、少壯有爲の學生である、如何にしてあらごなしをなすべきかと云へば、それは私が貳拾年前松村先生の御指導によりて、臺灣植物最初の材料をあらごなししたと同一の方法を用ゆれば宜いのである、私は斯の如き人に材料を與へて、且之れを指導して行くことは、即ち恩師松村先生及び先輩諸君の鴻恩に酬ゆる所以であると信ずる、此印度支那の仕事は、私がやつた臺灣の仕事よりは、一層困難を感ずるであらう、随つて私が曩に五年かゝつたものは、十年を要し、私が十年かゝつたものは二十年を要す

る、故に之れに當らんとする青年は、不惜身命の決心を要する、この決心さへあれば、私が贏けた位の成功は、期して待つべきである。學界は此の人の功績を認め、國家は私に與へた位の待遇を勿論此人に與へるのである。今此仕事は、如何なる人によりて爲すべきかと云へば、その人は下の條件を充たす人なるを要する。

- 一、天才の人よりは、寧ろ修養の人たるを要する、
- 二、數學に堪能なるを要し、且つ數學の素養を必要とする、
- 三、語學に堪能なるを要する、
- 四、繪畫を能くするを要する、
- 五、植物に對して愛情を有するを要する、

右の要件につきては、格別説明を要さざること、思ふけれども、一と二とにつき、少々説明を附加する、此種の仕事は藝術と云はんよりは、寧ろ事業である、故に天才に耽る人には出来ない、修養を怠らざる人に出來るのである、此の種の仕事は植物種類を分解するを要し、且つ綜合するを要する、分解することは因る分解法に譬ふべきもので、綜合することは、最大公約數を算出すに等しいのである、故に此の種事業即ち植物分植學的の仕事には、數學の素養を必要とし、且つ之れに堪能なるを要するのである、從來は、數學の嫌な人が植物學科へ入學して來た様であり、且つ植物分類學は、數學の嫌な人に適する學科の様考へられて居つたのは、大なる誤りである、昔日の分類學はいざ知らず、今日の分類學はそんなものでない、今日の植物分植學と他の植物學の分科との關係は、丁度數學と物理學、化學杯とのその如きものである、植物分類學は、徹頭徹尾數學的であらねばならない。

意注

- 原稿は四百字又は二百字用紙に認むべし
- 作品の種類は作者の自由たるべし
- 締切期日は遵守すべし

大正十二年六月三十日印刷納本
大正十二年七月四日發行 第九十七號

【すら賣に市】

編輯兼發行者 吉村政行
石川縣金澤市早通町五十六番地
印刷者 大村重松
石川縣金澤市高岡町九十番地
印刷所 明治印刷株式會社

發行所

第四高等學校北辰會

第四高等學校北辰會雜誌

大正十二年六月三十日印刷
大正十二年七月四日發行

第九十七號